

河南紀行

御  
挨拶

盛夏の候、戦友の諸兄には益々御健勝の御事と拝し、御慶び申し上げます。御健勝の去る四月、歩二一九会の有志が集い訪中する機会を得て、四十年振りに河南の地を訪れることができまして。思い出の多い彼是に夢にまで見たり、諸兄の御参考にな地の近況を報告し、諸兄の御容敵れば誠に幸甚の至りでありませぬ。程は御容敵を願ひ、御挨拶といたしませぬ。寺前信次拜

昭和五十六年七月

戦友諸兄殿

拜

河  
南  
紀  
行

參  
二  
一  
九  
會  
訪  
中

昭  
・  
五  
六  
・  
四  
・  
六  
・  
一  
三  
日

目次

第 八	第 七	第 六	第 五	第 四		第 三	第 二	第 一	第 四	第 三	第 二	第 一	◎ 第 二	◎ 第 一	◎ 第 一									
火 車 站	銀 座 街	開 封 院	夜 明 け	ゆ かり	相 国 寺	北 門	旧 河 南 大 学	鉄 塔	龍 亭	古 跡 を た ず ね て	温 故 知 新	姿 を 消 した 城 壁	章 開 封	鄭 州 から 中 牟 へ	霸 王 城	予 省 に 入 り 黄 河 を 渡 る	懷 しの 京 漢 線	章 河 南 兵 路 は 行 く	北 京 の 印 象	北 京 空 港 に 立 つ	章 北 京 を 訪 れ て			
				5	4	3	2	1																
: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :
26	25	24	21	19	18	17	16	14	12	12	10			8	8	6	5			4	4			3

		◎ 附 記																																				
		訪 中 雑 感	第 六	第 五	第 四	第 三	第 二	第 一	第 六	第 三	第 二	第 一	第 五	第 六	第 五	第 四	第 三	第 二	第 一	第 四																		
5	4	3	2	1																																		
对 日 主 对 外 国 人 感	精 神 主 義 の 復 活	民 衆 の 生 活 国	三 重 苦 中 国	殉 国 者 の 祈 願					章 洛 陽 の 概 要	纏 り の な い 想 い 出	鄭 州 の 概 要	河 南 省 の 概 要	章 南 鄭 州	中 牟 の 別 離	今 昔 の 感	慰 霊 の 跡	大 黄 河 の 跡	中 牟 訪 門 の 意 義	歴 史 上 の 中 牟	章 中 牟																		
: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :	: : :											
59	58	56	55	52					51	48	46	45	44	43	42					40	40	39			38	36	34	32	32	29								

日中の過去を顧ると、昭和六年に滿州事変が勃発し、同十二年に日支事変へと戦禍が拡大され、引続く同十六年に至つて第二次世界大戦に突入したのが、その傷ましい戦争の体験は忘れることができない。我々年代の人達は好むと好まざるに拘らず戦渦の悲劇の中に身を曝し、戦鬪の凄惨、愚劣、損失を生命を賭して経験したが、極言すれば戦うために生れたような感がする。一時期とはいえ私も歩兵第二一九聯隊の一員として死線をさまよひ、鬼神の如く戦つた凄絶な光景は網膜から消え去ることはない。悲惨な死闘を繰り返し、血潮で染めた河南省の戦場にせめて生のある間に彼の地を訪れ、亡き戦友の靈を慰めたいと念願していた者の一人である。

幸いにも昭和五十三年八月、日中平和条約が調印されて兩國の關係は新たな段階を迎え、各分野で幅広い交流が促進されている中で、青春を犠牲にし苦しい死への陣痛を味つた修羅場に、漸く慰靈の為の訪問が開放されたことは誠に嬉しいことである。

吾が戦斗記録として「兩忘」を書きあげたが、犠牲となられた將兵の鬼哭の

声が風にのつて聞えてくるような心境に立たされ、慰靈を終えて帰国したところへ第四中隊出身の亀井一夫氏から、二一九会訪中の通報を受け、たのである。勿論、待望していた私にとつては千天の慈雨の如く名状しがたい興奮であつた。悠久の黄河の流れに思いをいたし、氷を背負つたような戦慄で戦つた中原の地の香りをかぎ、慰靈の誠を捧げられたことは落涙紙面をぬらし、たと云つても過言ではない。

次第に年老いていく身体の衰微を感じる今日、有志戦友の御尽力に依り、死の世界を生きのびた者の責任の一端を果す事ができたことは、喜びに堪えない。又私にとつては無能な指揮官とあつたことは論を俟たない。

「物換わり星移つて幾秋をか度る」物が変化して時がたち、いく秋が経たのであるうか。四十年の歲月を経過した古戦場に立つたとき、悲しい風が千里の彼方から吹き荒ぶように、我が胸中をえぐつていた。

古の一端に供する事ができれば幸いである。昭和五十六年四月

第一章 北京を訪れて

第一 北京空港に立つ

昭和十五年、歩兵第二五聯隊から歩兵第二九聯隊に転属を命ぜられ、北支派遣軍司令官に申告をした初回の北京への足跡から四十一一年余の星霜が経過し、其の後も数回にわたり訪れた古都は懐しい。思えば「人生は白駒の隙を過ぐるが如し」といわれるように、実に短いもので胸が衝かれる気がしてくる。実に短いもので鳥瞰される空港の周辺は、麦が青々とじゆうたを敷いたように、耕地は整然と整理されて、農業の近代化が進んで、裕福そうに見える農村風景は、隔世の感を懐かすに足る変化である。國破れて山河あり。過ぎた若き日の糸をたぐつてみると、見るもの聞くもの総てが我々の心をいため始めてくるようだ。異境の靈地・古里の河南の空を想い浮かべ、慰靈の靈地・古里を北京空港に降り立つた一群は、二一九会有志二八名の姿であつた。慰靈の靈地・古里を八名の姿であつた。慰靈の靈地・古里を悪の干ばつでも河北省が、過去三七年の間で最氣温二〇度以上の暑さには驚かされる。四月初旬の

第二章 北京の印象

中国国際旅行總社の「劉桂香」氏以下三名の通訳達から歓迎を受け、一行を乗せたバスは一直線に延びる空港道路を轟進して行つた。中国では何処の地方を訪れても同じく、道路といふ道路はすべて松やポプラの街路樹で覆われ、植林報国。自力更生の姿が目付き、徹底した行政の力が窺われる。(街路樹は将来パルプの原料となり一石二鳥である)

空港と市街との距離は十八軒。幅員四〇米の空港道路は一九五八年に舗装された立派なもので、養を運ぶ光景まで眼に映り、大都会と田舎が同居している感じである。昨秋、広州を訪れた際、訪てはいたことのない。昨秋、広州を訪れた際、訪日したことの遺訊に、彼の最大の差は何かと質問したことがある。遺訊に、彼の最大の差は何かと質問したことを思い出す。

自転車の洪水の波に誰しも驚かされることだが、北京だけでも三五〇万台だと誇らしげに通訳は説明する。時には競輪用の自転車までも飛び出し、オリンピックを目標にした若者達は練習に励み、将に自転車王国である。夕食をとつたが、あいにく停電にぶつかり、大テーブルの上

にロソク一本という粗末さには、新ためて  
 びつくりする。敗戦後の日本の昔に逆回して  
 たようで、前宣伝とは雲泥の差の北京の夕食風  
 景だ。又夜の市街は店舗がないために往時より  
 も薄暗く、我が国より三十六年の後進国だとい  
 う第一印象であつた。三十八年の後進国だとい  
 予定の二〇時四分発の鄭州行の寝台列車は  
 満員の二〇時四分発の鄭州行の寝台列車は  
 車に変更に乗車できず、二三時四分発の列  
 したの三・四時である。ソ連に旅行した時も同じ  
 ように三・四時である。ソ連に旅行した時も同じ  
 つたが、おしなべて社会主義の計画は出たら  
 目でずさんなのである。絶対統轄の可能な  
 体制にしては皮肉な現象である。絶対統轄の可  
 深刻な財政赤字で外貨獲得に懸命の余り手段を  
 選ばず、どんどん能力以上の観光客を受け入れ  
 うか。これが輸送機関の間に合わないでなかる  
 資本主義の社会では、平氣で信用を失墜すること  
 にもなる。だが、彼等は平氣で一言の詫びの言葉  
 も述べない。競争や利潤を求めない社会の欠陥  
 がこのように表面にも有名な北京飯店のロビーで  
 い、この面々有名な北京飯店のロビーで  
 休止する。この面々有名な北京飯店のロビーで  
 中国随一のホテルにツプでは薄暗い照明で異様な  
 感じだ。この面々有名な北京飯店のロビーで

して代金を支払い、自分でテールまで運ば  
 なければならぬ。組だ。過剰サービスで慣  
 を身につけた我々は、窮乏の中国に生活する中  
 人の実態を見せつけられた。中国に對する評  
 を再検討すべきである。印象を与えられたのも  
 偽りのないことである。

第二章 河南路へ老兵は行く

第一 懐しの京漢線（現在、京広線）

北京飯店のロビーで三時間もの長時間を持  
 余し、せつかちな私でも中国人のように慢  
 にならざるを得ず、絵葉書を買いて家族や  
 戦友達に便りをしたため、時間を有効に過  
 漸く通訳に案内された。北京駅に向つた。二階  
 建の駅舎も矢張り薄暗い。戦争中、中国人は布  
 団をかついで乗車した。群衆が集り、構内には昔  
 変らぬ情景が映つた。列車を待つところ  
 いる土間の上に寝そべりながら、直のとき  
 ろる。待つ暇がなくて、眼を映つた。直のとき  
 往時の生活の実態を知らないうた多くの  
 人達が、中国を過大に評価して訪中した。多  
 過ぎないものが多く、報道は現実をなごめ納得よ

うな気がしてならない。  
寝台列車は日本の寝台と同じく四人室だが、広軌のためゆつたりとしており、小テーブルがあつて湯茶のサービス付きは旅の疲れを癒すのに喜ばしい。しかし食堂車がなくポール箱入の朝食携行は戦争中のもう一つ、航空便の遅外貨獲得に血眼な中国であつても、航空便の遅れては望めず、観光外人客を対象とした寝台列車の第一印象は芳しくない。  
我々の横暴を極めた時代の一等車は既に姿を消してしまつたが、王侯貴族の専用車みたいな豪華な二人室の寝台車が想い出される。しかし夢よ、もう一度など大それた夢は逆夢であることとは、論を俟たない。  
午前零時を過ぎて床に就いたが年の性か、それとも興奮のためか目覚めが早く、四時間も睡眠がとれたらどうか。  
夜が明けて通路の窓ガラスの向う側には、大な河北の大平野が見えている。懐しい景色で大行山脈の険しい峰々も目に映つてゐる。  
列車が停車した。車窓のカーテンを開けると、もう「邯鄲」に着いたのだ。夢枕で有名な此の地には当時、独混一旅団が駐屯し、私の長兄が勤務してゐた懐しい処である。夢枕の響は一人

世の榮枯盛衰は一炊の夢に過ぎず、短くはかな「い」ということで、六十余年の我が生涯に似ていふようだ。そして富貴などは草の上の露にも及ばない、はかないものだとの杜甫の詩を思い出すと、ひとりでに感傷的になつてくるようである。  
河北の大広野を突つ走る列車が、いよいよスピドをあげて河南へと南下して行くにうれ、遠く昔に見た風景だと氣付き手に脂汗が滲み出てくる。

## 第二

予省に入り黄河を渡る  
(予省は河南省の別名、予州と称す)

壯士慘として中原に鹿を逐つた予省に進み、膨大な肥沃な土地は麦や菜の花の緑と黄で覆われて、世界三大生産地である綿花もそろそろであらう。

「瓊県」に停車した。私の赴任当時の聯隊本部の所在地である。春草や樹々の若芽がもえだす昔と変らぬ風情は、懐古の情を一段と深めさせてくれる。「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と大志をいだき血氣盛んだつた若者達は、すでに白髪となつてしまつた。それだからこそ蔡情は格別である。「新郷」に止まる。新郷が新郷と簡



略されて文字の国らしくなく、稍々寂しい感が  
 する。歩二二〇聯隊本部の在つた此の地は工業  
 都市として発展し、綿紡織が盛んで活気が溢れ  
 てゐるようだ。栗栖聯隊長や大須賀中佐を始め  
 として先輩諸兄に世話になつた思い出の地であ  
 り、殺伐の中にも青春を謳歌して若さを発散さ  
 せた光景が脳裏に浮んでくる。  
 経て黄河を渡り、直接開封に鉄道が通じていた  
 が、日本軍の敷設した其の線は現在撤去されて  
 京漢線は鄭州に直行している。  
 代、愈々悠久の大黄河の流れに差しかかつた。近  
 代技術の粹をあつめて架設した二条の大橋梁が  
 五、千の歴史の深さを雄弁に物語つてゐる。黄河  
 は、我々に新しい時代の訪れを教へてゐるよ  
 うだ。  
 訪、中団一行の「ウオー」という歓声というべき  
 か、喊声が車内にみなぎり、四十年もの久しい  
 若き日の血湧き肉躍つた追想が込み上げてきた  
 のである。これが即ち歓天喜地の歓呼と云うの  
 かも知れない。  
 今ではすべてが夢となつてしまつた。夢の、  
 また夢の、遠い遠い世界の歴史の瞬間に過ぎ  
 ないが、幾度となく死地を潛つた者だけが味え

つとるに瞬りないとはび人遠山。い沈心てののはつたのでの苛  
 大河の思いの去うか、は得生な河。鳴るの我情と、た連の酷  
 をつだ去うか、は得生な河。鳴るの我情と、た連の酷



黄河の鉄橋と霸王城  
 望は、歳月を越えた鮮やかな映像と  
 こびりついている。

渡つて行つた。

### 第三 霸王城

此を決して黄河の南岸を凝視すると荒涼たる霸王城の山々が見えてくる。(前頁写真参照) 昭和十六年秋の河南渡河作戦以来、私が指揮をとつた中牟城と相俟つて、ともに黄河南岸に孤立無援しかも背水の陣の橋頭堡として、死中に活を求めて衆敵を激撃した北支派遣軍最大の激戦地の一つが、この霸王城であつた。 霧兵克く数十倍の強敵を迎え四六時中、猛砲撃に堪えて戦つた石山第三大隊長以下将兵の辛苦は、同じ戦況の修羅の世界に身を曝して力闘した私には、我がことのよに思われるのだ。 車窓から眺める移り動く景色、あの山麓あたりにも砲列が火を噴き咆哮が聞えてくるような錯覚に陥るのは、五里夢中の中で我を忘れて生きのびてきた者の直感的な幻想かも知れない。 眼前に走つて行くように見える地形を見つめて、石山少佐は如何に戦陣し如何に戦闘指導したのかと、瞬間的に戦術の構想を練る私は、錯綜した心理に立たされながら黙して語らずだ。 それほどまでに防禦する者にとつて至難な地形だと判断したからである。

此の地で死闘を繰り返した第九・第十一中隊は私も在籍した中隊であり、未知の霸王城ではあつても中牟城と同じような想いを抱かせるのだ。 霸王城周辺は血なまぐさしと、痛恨の胸中は自ら戦友の靈に掌を合わすのであつた。

### 第四 鄭州から中牟へ

北京出發が遅延して一〇・三〇に鄭州に到着した。中国国際旅行社鄭州分社の通訳「郭林山」氏が駅頭に出迎えてくれる。 其の当時の敵第一戦区總司令官「衛立煌」の牙城に、今こうして平和の裏に訪れることは、夢想もしなかつたことでの己の眼を疑うほどだ。 暫し「我れ吾れを忘れる」という陶然とした心境で降り立つたのである。 鄭州へ鄭州へと進撃した河南作戦、深井第一大隊長を始めとして帰らぬ人となつた亡き戦友の面影が、彷彿として偲ばれてくる。 「一生は寄なり。死は帰なり」とは禹の言葉だが「人生は此の世に身を寄せる飯の宿としているだけで、死は故郷に帰るようなものだ」、大平の中に浸つて生きている我々には縁遠い言葉となつてしまつたようだ。願ると本当に人生は夢のようで、朝露の如くはかないものと嘆かざ

るを得ない。ひたすら慰霊あるのみである。予定が変更されて鄭州の見物を全廃し、バスは開封へと東進を始め、新設された隴海線を南に見て河南の小平野を矢の如く突つ走る道路（簡易舗装）を快走して行つた。

賭け死力を尽して戦つた中牟城を険にうかべな  
 がら、一木一草も見逃してはならないと最前列  
 に陣取ると、私の網膜は異状な緊張をし続けた  
 のである。自分一人、あらためて中牟を慰霊訪  
 門する下準備のために、気が焦り鼓動は早鳴を  
 していた。

町を通過した。地図を広げると「白沙」の  
 町らしい。中牟はもうすぐだろうと座り直して  
 興奮が続いた。一面真黄色で花盛りである。毎  
 菜の花畑は一面真黄色で花盛りである。毎年  
 来る年ごとに咲く花は同じだが、これを眺める  
 人は其のたび毎に変るものだと現在の自分を  
 顧みて涙をさそつてくるようだ。

唯一の目標となる中牟の城壁は見えないが、  
 一寸とした市街地に入つた。街路の両側に工場  
 が建ち並んでゐる。

左に「中牟県人民政府」の看板が眼に映つた  
 鳴呼！「中牟」だ。しかし昔の面影は何一つ  
 見当らない。無情にもパスはスピードをあげて

通過してしまつた。何れ明日か明後日、単独で  
 現地慰霊に参るのだと心を躍らせながら車窓か  
 ら瀟視し、黄河の跡は何処だろうかと只それだ  
 を懸命に捜し求めたのである。河床の位置が把  
 握できれば城内の総てが判断がつき、地形の概  
 要だけはつかんで置きたい一心だ。

街の外れを左折して行つた。バス直前に、大  
 河の跡が東西に延びてゐる。生々しい記憶の大  
 岸は樹木で一杯である。何と似た変貌だろう。両  
 渡つてゐる麗の大河は今では二・三〇米の幅の  
 用水の小川になつてしまつてゐる。

人生にたつた一度しかこない青春を大黄河の  
 流れと運命をともしかこない青春を大黄河の  
 に戦つた悲惨な場面を想起する暇もない胸騒ぎ  
 であり、合掌して慰霊するゆとりもなく数秒の  
 うちに通過してしまつた。

旧隴海線の路床がちらつと瞳孔をかすめた。  
 線路の跡は草も生えず昔のままの姿を残し  
 、これで地形の概略が確認できた。

限りある生命の中で夢み続けた夢が現実とな  
 つた。飲ひは、誓える言葉も知らず、明日以降の  
 現地訪問に期待をかけるがら、三十八年ぶりの  
 思ひ出の地「中牟」をあのにして開封街道を驀  
 進して行つた。

見渡す限り延々と続く街路樹の間を、荷車の

上に帆をかけた異様な農民の運ぶ光景は珍らしく、人民公社の慶天達の人海耕作も一行を楽しませ、戦争当時の砂塵濛々だったあの道路。イナゴの大群が作物を食い荒らし、路面一杯、真黒に群がる上をピシピシと踏み殺して走つたトラック道は、この道だつたのだからか。網膜に映るすべが、昨日のことは一つないようであつた。心を傷めないものは何一つないようであつた。

第三章 開封

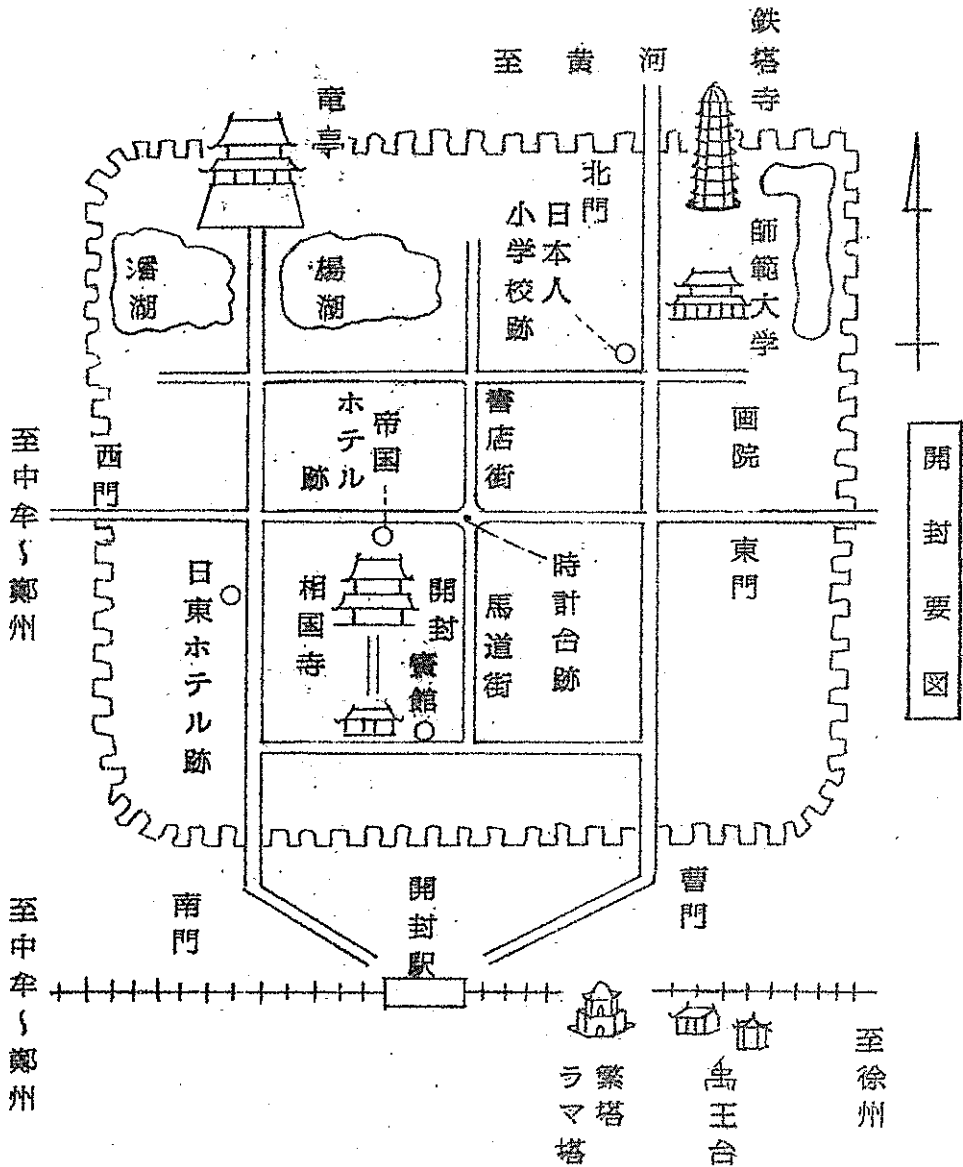
第一 姿を消した城壁

身を硬直させ手に汗を握らせた中牟から、兵の憧れの都だつた開封までは、当時トラックで約二時間の悪路であつたが、今は舗装されて道幅も広く十分ほどである。今、舗装されて来た。通訳の方から工場の煙突が林立して見えて、動が湧き上がった。郭一氏は開封だと説明する。何と、大変化・大発展だろう。一瞬間である。動が湧き上がった。郭一氏は開封だと説明する。共通する目的は開封だ。古戦場でもあり又青春を発散し、浩然の氣を養つた華の都だ。四十年

ぶりに訪れたことは、誠に奇跡と云わねばならぬ。往時、青雲の志を抱いて闊歩した若人達も既に白髮の老体となつた事を思えば、古都の大変貌も当然のことである。どのどん映像は大きくなつて、街が近づいてきた。開封の郊外といえは新兵舎は何処だつたか。と眼を配つて見ると、樹木で遮ぎられて遠く迄は見えない。アパは工場地帯にさしかかり、労働者用の高層アパは井然と聳え建つ谷間を疾走して行つた。

い・発秋、訪れた雲南・広西省とは比較にならない。支那中原の都の貫禄を遺憾なく誇示した所謂。開封の南には青魯河が流れ、南船北馬の分途として栄えた朱仙鎮を擁し、水陸交通の要衝だつた古都及び其の周辺地区は解放後も見逃されることがなく、重点区域として施策されていよう。バスは西門から城内に入つたが城門や望楼は取壊され、通訳が此処が西門跡だと説明しなれは、城外の水壕の一部分は見当らずに過ぎない。有様だ。勿論城壁は見当らずに過ぎない。史を秘めた城門や城壁を破壊したことは、幾多の歴史

物しても、饑饉の至りあり  
 魏の大梁、北周の汴州  
 梁の東、初めに北京に  
 汴、京の明封府と名を  
 つづ、えたい古都の面影が  
 変、えたい古都の面影が  
 ならず、誠に惜しい氣が  
 変、西門に近い城内は昔と  
 汚く、依り混雑して場末の  
 街だ。バスは想いで多いの  
 城内を相国寺の門前通り  
 へと飛ばし、側に行つた。寶  
 か、客と東の封、寶館、  
 の、癪すこりと、長途の、  
 を、癒すこりと、長途の、  
 漸く、姿ではな、都は昔の  
 ま、京の姿ではな、都は昔の  
 知、京の姿ではな、都は昔の  
 来、京の姿ではな、都は昔の  
 が、京の姿ではな、都は昔の  
 なる、京の姿ではな、都は昔の  
 鳴、京の姿ではな、都は昔の



第二 温故知新

開封は黄河の南岸に在つて、其の面積は三五〇平方軒。当時の人口は約二〇万だつたが飛躍して現在は五〇万余の大都市となつてゐる。有名なる中国六大古都の一つで三千年の歴史を有してゐる。紀元前の殷商時代に築城され、前記したよるに戦国時代の魏国、五代の梁・晋・漢・周及び北宋・金の王都として榮え、特に北宋は九六〇〜一一二七の一六八年間も此の地に都を置いて「東京」と稱し、全国の政治、經濟、文化の中心地であつた。

その古い歴史の都も二六回にも及ぶ黄河の大氾濫に遇い、いま保存されてゐるものは竜亭・鉄塔寺・相国寺・繁塔（ラマ塔）・烏王台等だけになつてしまつた。

解放前の開封には百人以上の工場は三つしかなく、戦禍に遭つては生産は低下して来たが、一九四八年十月、開封が解放されて以来急速な發展を遂げ、現在は機械・化学・紡績・軽工業等の工場が五百余にも及ぶといわれ、工業都市化のみならず大消費都市、文化芸術都市に変化してゐる。

第三 古跡をたずねて

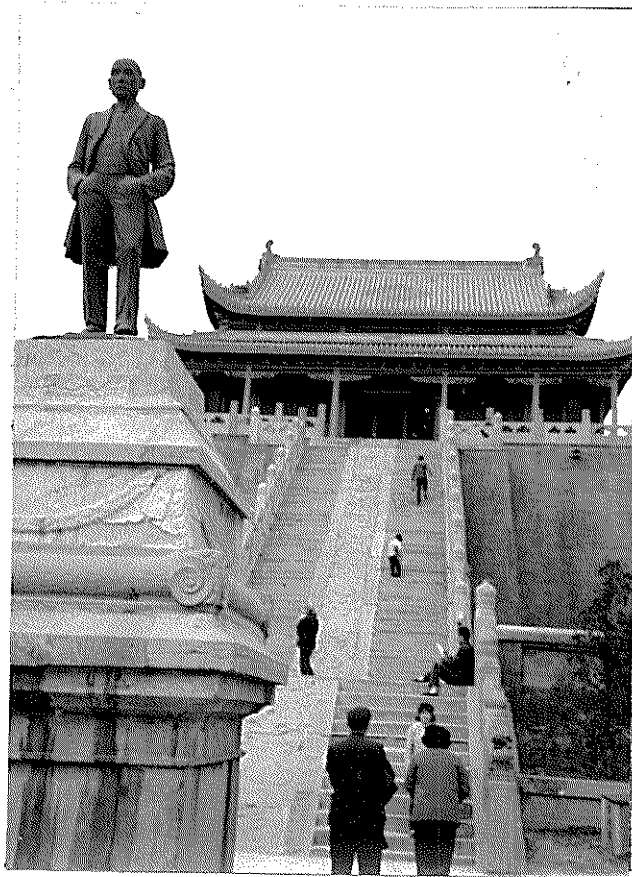
昼食を終えた一行は懐郷の感激にしたりながら古跡巡りに出發した。かつて從軍した春の日に、開封小唄を口ずさびながら遊歩した跡は如何、と胸の鼓動が弾んできた。

1 竜亭

北宋の紫金城として建立された故宮の遺跡である。宋を亡ぼした金（一一二五〜一二三四）の時代には万寿亭とも呼んでゐた。一六八〇年、現存してゐる竜亭大殿は一七三四年、清の雍正十二年に建てられたと云われてゐる。清の雍亭の南面にある潘・楊の二つの湖水は陽の光を浴びて輝き、大殿の影を湖面に映す壯麗な景致は昔も今も変らない。

聯隊旗手として約六ヶ月、開封の河南大学に駐留した際に、湖間の楊柳の間に洋車を走せた記憶は脳裏から消えず、想い出の都の忘れられな旧跡の一つである。

共産革命は所かまわず赤を塗りつぶし、眼を刺激して飽き飽きさせられるが、この竜亭の正門も亦例外ではなく朱色に塗りかえられて、我



竜亭大殿と孫文像

を運ぶための荷車一台に、五・六人の若者達が  
 は一切使用わず総てが海戦術だ。深い所から土  
 の発掘作業に汗を流しているのが見えたら、動  
 東側の揚湖は水を干して、多くの苦力が遺跡  
 だ。と云わなければならぬ。矢張り時代の流れ  
 には孫文の銅像が建つていない。正面に据えられ  
 た一對の獅子は宋代に彫られたものだが、門内  
 々にとつては好感が持てない。正面に据えられ

そのたの湖。精  
 れ石で在情のこを  
 影を緒中央に反して  
 志を眺るし日の孤立  
 を眺めか。のこして  
 抱いた、北京に登つ  
 たものだが、龍の心  
 今では遠い昔の大  
 笑

そのたの湖。精  
 れ石で在情のこを  
 影を眺るし日の孤立  
 志を眺めか。のこして  
 抱いた、北京に登つ  
 たものだが、龍の心  
 今では遠い昔の大  
 笑

る友戦 ない々え 建物 蔣つ えるの鉄 いた草 い  
 うは、い 人間 殿宇のそ 介たの湖 てくる二 塔殿  
 か、に 万事 静かに 石の南のて高つが上  
 。我身 塞翁 幸に 廻りのもがの側れて層が天  
 無等の 幽馬 福に 遊を見の台あるにシンボ 街  
 言の訪し 明と 立ち 歩 見え 去つた 有名 博  
 中をれを 如何 止つて 昔の 記憶を 知る 財  
 悲 哀が 湧いて きた。 銘

る友戦 ない々え 建物 蔣つ えるの鉄 いた草 い  
 うは、い 人間 殿宇のそ 介たの湖 てくる二 塔殿  
 か、に 万事 静かに 石の南のて高つが上  
 。我身 塞翁 幸に 廻りのもがの側れて層が天  
 無等の 幽馬 福に 遊を見の台あるにシンボ 街  
 言の訪し 明と 立ち 歩 見え 去つた 有名 博  
 中をれを 如何 止つて 昔の 記憶を 知る 財  
 悲 哀が 湧いて きた。 銘

然しながら慰靈するにも仏像はなく、殿宇の扉も閉つてゐる。勿論、竜亭は故宮であつて釈迦の安置されてゐる訳がないと氣がつき、別離を惜んで城内に眼をやると、此の眺めだけは「依稀として往年に似たり」という眺望であつた。

### 開封小唄の第三節

霧に浮んだ蔭絵かべにか  
うすらあかりの書店街

## 2 鉄塔

雄偉城内の東北角に聳える鉄塔は、往時のように北宋の皇祐元年（一〇四九年）に建てられたもので、塔は八角十三層。高さ五五米。硫磺瓦の塔は、表面には二八種類の煉瓦を組み合わせてつくり、中国第一の塔である。種類の模様がつけられて、夕に師団司令部や聯隊本部に勤務する兵は、形相従といふべき存在の鉄塔を仰ぎ、駆ける馬にも鞭とばかりに精動を続けたものである。

は、昭和十三年六月、帰徳の堅陣を放棄した蔣軍は、十数ヶ師団の大軍を開封附近に集結して決戦を挑み、我が遠山・横山部隊の猛攻のまゝに六月六日未明、陥落したのであつた。そして鉄塔は其の時に受けた生々しい十数発の弾痕をありと残してゐたが、今ではすつかり修復されて以前にも増した美麗な姿に化粧されていたのである。

空を見上げるように鉄塔を仰ぐと、彷彿として浮んで偲はれてくるのは当時の戦友の姿だ。当時の戦闘に引続き南太平洋に転戦して、大半の将兵が此の世を去つてしまつた。

皮肉なことにも、黄泉の客となつた英靈の忘れ難い鉄塔だけは、天高く巖然と昔の雄姿を留めていて、鉄塔を通して血の叫び聞えてくるように、心に立ち戻つた我々は、心を傷めながら塔の廻りを徘徊したのである。

河南省を始めたとして黄河流域の土は黄い色をしてゐるために、黄土の下のことを黄泉と呼び、死者のことを黄泉の客と名付けたのだからか、黄塵万丈の砂嵐の中を敢然と進軍したあの時、の黄砂が、悲しい便りのように日本までも運ぶ、私の瞳は鉄塔の周りの景色に向けられた。





鉄塔寺

湖沼が見えた。城壁も見えた。初めて大発見をしたような歓喜である。古い城跡の東北角一帯は、一日千秋の思いで訪れた夢のままの姿を現している。そして温いなごやかな古都の一角は愈々我等の慕情をつのらて、此の鏡のような湖水をたたえる古戦場は桃源の地の如く一行を迎えてくれた。

眼を九〇度右旋回すると、河南大学の大会堂が根瓦を見せたいで早く来いと手招きよ

湖水と城壁の東北角



根瓦を見せたいで早く来いと手招きよ

独り暮しのやつれが見えて

風にすねてる鉄塔寺

小椽雨かと空見上げれば

河の黄河の砂が降る

(開封小唄四節)

四十年の歳月を経た今ここに立ち、口ずさぶ  
開封小唄は悲哀に満ちた悲曲のように思えてな  
らない。

### 3 旧河南大学

我々老兵の心中を汲みとつてくれたのか、開  
封社の通訳嬢はバスを旧河南大学へと案内し  
てくれた。当時は新黄河以北の河南省を制覇し  
ていた第三五師団司令部と歩二一九聯隊本部で  
あつた。  
司令部の大会堂のあつた正面には豪華な校門  
が建ち(写真下)、河南師範大学と金文字で書  
かれ、旧聯隊本部の營門附近にも河南師範大学  
と看板が掲げているが、往時の面影を留めてい  
るのには前記の大会堂だけのようだ。  
聯隊本部のあつた医学部は鄭州に移転し、旧  
開封高等師範が師範大学に昇格したもので、中  
国の夜明けを目指す教育の新しい足音が響い  
てくるような立派なものである。  
大学の周りは総て煉瓦塀で囲まれて、校内の参

観の許されないことは残念だが、当時の武威を  
ほしいままにした無謀な占拠だから、致し方の  
ないこと  
軍旗を安  
置した二  
階建の聯  
隊本部、  
其の後方  
の将校宿  
舎はどの  
なつてい  
るのか。  
旗手時代  
に起居を  
していた  
我が家の  
跡まで忍  
び込んで  
みた。懐  
しさを一  
杯だ。  
軍旗を捧  
じ戦に出  
陣した時

河南師範大学の正門



や、師団經理部幹部候補生・兵科見習士官教育に從事していた充実したあの時、或は夜な夜な華の都の誘惑に堪え切れず洋車の上の人となつた青春時代の。すべてが故郷に里帰りしたような興奮の想い出ばかりだ。ともあれ殺伐とした戦陣生活で、此の跡だけが電燈の下での生活だつたのだ。懐しい開封と云えば私にとつては河南大学が最も印象が刻まれていて、この大学の出発前の二月三日の報道によると、この大学の数千人の学生が「人權・自由・民主」のスロ―ガン掲げて、校内デモを繰りひろげたとの事であり、又同じく河南省の安陽でも大学ストが起り、昭和四三年ごろの日本の大学紛争を思い出す。何れの国でも同じ過程を踏まなければならぬのであろう。

#### 4 北門

鉄塔。大学に別れを惜んで北門に案内されたが、ここも城門や望楼は取毀されていた。道路は拡張されて両側の城壁は昔の要害堅固な形を残し、当時の「一夫関に当れば万夫も開くことなし」の気概を示す関所風景を味わわしてくれた。昭和十四年初春、開封は一時敵の奪還するところとなり、この時一行の中の十三年徴集の諸

兄は初年兵として初めて戦闘に参加し、がたがたと震えながら戦つた状況を語り合つていた。た初陣戦と云えば誰しも変りはない。緊張と恐怖の余り震えが止らないのも無理はなく、彼等の会話につられて、自分の「通許」南方の初陣まで思い出させたのである。演習場があつた。北門城外には砂丘地の適当な演習場があつた。よく幹候生を引率して幾度となく通過した北門。今もなお我が脳細胞の中に明瞭に残つていた。西風をかじりながら、中国の人が豚の頭をかついで行く姿を見かけた場所の一つでもあつた。社会主義国となつた今日では、あのような大陸的な風情が消えて物寂しい懐しさを覚えるものだ。私の向う脛の傷の跡もこの城門外のことだ。少尉候補者の試験委員として実兵指揮の採点中、馬上の私の脚を中佐参謀の乗馬が蹴り上げた、痛い目に遇わされて北門の衛兵所で休憩した事まで脳裏に浮んで来た。出来事が次第によみがえり、記憶をたどりながらの古都巡りも、益々熱が熱したように楽しいものであつた。戦後になつて黄河の流れは旧黄河に復し、開封の玄関の港として凶上には柳園口が書かれており、この北門を通過して北上すると此の港だ

申し上げるものが我々一行の大目的であつた。第一大隊は通許・霸王城を訪問する希望を提出し、三日本の旅社に中国側に連絡済という信じて、今次訪中団に参加し、実現できるものと信じていたのである。

本日、意義深い古都巡りを終えて、明日或は後日には、憧れの里に行けるものと胸を弾ませ、万里もへだてた彼方から飛んできた疲労も忘れて待ちわびていたところ、開封分社は希望地への訪問は許可しないと通告して来たのだ。将に青天の霹靂というか、これ程心底から落胆し憤慨したことはない。

多額の費用を惜しまず、貴重な時間を費してまで、実現した河南行は、只の物見遊山ではないのだ。怒髪天を衝く肺腑をこらえた数回の交渉も要領を得ず、彼等の通告を撤回するまでに至らない。

それならば何故に日本の旅行社は募集したのか。二一九会の名称を始め目的を理解せずして金儲主義に走つたのか、其の誠意が疑いたくない。

渉する。出発前に確認をする事もなく現地で交批難を浴びても弁明の余地がない。推察し、是に苦私の心は訪中団諸兄の心境と推察し、是に苦言を呈して猛省を促したい。

中国国際旅行社に於ても、前以て連絡してあつたにも拘らず、現地に到着して初めて不許可を通告した事は、誠に怪しからぬことである。彼等の不許可の理由は一開封以外は非解放地区、一という事、即ち解放されていない地区は、案内が出来ないと云うのだ。解放区は、非解放区、の別が厳然と区別されていなければ、我々の主旨からして当然入国を不許可にすべきであつた筈である。

社と日本旅行社の意志の疎通が不十分か、総社と日本旅行社の意図が被害者には我々である。我々は知る術もないが被害者は我々である。国を挙げて日中友好を叫びながら、出来ぬ事は出来ぬと何故に伝達しないのか。半年も以前から希望や計画を通報しているに拘らず、信義に反する行為と云わなければならぬ。

中国は孔孟を始めとして多くの聖人を生んだ。国柄で、道徳が重んぜられて多くの盛んに教え込まれた一人である。其の一つに五常があり仁・義・礼・智・信の道を説いている。

左伝にも「信不繼、盟無益也」ちかいをしたところでも「もしそれに信義が続いていないければ、何の役にも立たない」と諭しているのだ。

易経には「信及豚魚也」人間の信義の力は豚や魚をも感動させる、と説き、信とはそれほど偉大なものである。

旅行社に教える偽り欺かない信だ。

それにして「解放」とは社会主義の国にとつては都合よい言葉である。大陸を解放して人を樹立しながら「非解放区」がある事は、日本には理解できないばかりか、社会主義国の自由がなく徹底した官僚制の悪弊を如実に物語っている。愚痴を云えば、私が昨秋雲南・広西の慰靈巡礼の旅に参加した際に、我々の熱い熱意に感動した通訳は希望者が一人であつても、又一〇〇の遠隔地の僻地であつても、通訳が同乗してハイヤを飛ばしてくれた涙の出る実例がある。治安上の問題から雲南省の辺地ならば疑問もあるだろうが、天下の中原の地・河南省に於て何たる事であろう。其の上たか三・四〇〇の地区ばかりで、案内役の通訳は常に四名以上が付添つていて、案内役の通訳は常に四名以上絶対的ではなく、申請して許可を受けておれば訪問できる点は、私も前々から承知していることであり、当然に日本の旅行社が申請して中国旅行社は了承したと信じていた事が、両社に欺騙されたのである。戦後四十数年の旅行した私にとつても初体験であつて、訪中団戦友の無念な表情は見るに忍べず、日中友好の宣伝は掛け声ばかりとしか思えない。日中友好の宣伝は掛け幸いな事に亀井氏の御尽力に依り、帰路に再び通過する「中牟」だけは短時間だが、用便の

ためと云うことに暫く停車することになつたもの、他の諸兄に申し訳がない気持で一杯である。然しながら欲を申せば私の実現できなかった希望地に、三國志にも出てくる通許や陳留も含まれていた。第九中隊の小隊長としての古戦場でもあつて初犠牲を出した霊場の参拝はままならず、借しまれる憤怨の情は眉を曇らせた。離れの挨拶の言葉のために北京を發つ際、通訳の別門する時は、予め中国国際旅行社周辺地区を訪渉くれるように述べたのである。このことは交渉に依つて各々の古戦場に訪れる事が可能なことを意味し（非解放区）、これから訪問を計画される戦友諸君。団体は前者の轍を踏まないように、綿密な交渉をされるように希望する。

### 第五 夜明けが招く

再度の訪れは期待できず、現地慰靈の途が絶たれた。昨夜のサカスには少しも興味が湧かなかつた。独り個室に横臥して憤懣やる方なく、心中は涙雨の如しと形容したいほどであった。心は寝つかれない開封の夜は深々とふけて行く。

春眠曉を覚えずという四月初旬の季節だが、東  
 の外燈の明けない街にぼんやりと浮び、霧り  
 がしつとりと黎一面を濡らして早朝の街の中へ飛  
 び出すと、かれた夜明けの路へ招かれた。相国寺  
 背後の陣敷、菅府のたてがみ、常宿  
 日開封に出張した我が脚は、常宿  
 ある。兄弟の愛顔に親しむ。夫と  
 私好みの可愛いは、親しむ。夫と  
 聞かぬ。今では、信じて。夫と  
 どうしていたか。四十年ぶりに、夫と  
 玄關に立つた。うらやま。夫と  
 の夢を再演した。うらやま。夫と  
 通りには、通る物もな。古里の  
 てい、は、通る物もな。古里の  
 封の、は、通る物もな。古里の  
 あろ、は、通る物もな。古里の  
 帝國ホテルの暫くの間、私に  
 違はなかつた。私に  
 人専用はなかつた。私に  
 まだ。又旅館の姿を変えた。私に  
 中に急いだ。私に  
 中描いた。又旅館の姿を変えた。私に

ば十かりの遊歩を続けて行つた。  
 とは、大広場の  
 といつて、そ  
 の中央に、  
 交通の塔  
 が建つて、  
 の指令塔  
 の数人  
 ば、巡  
 査は、巡  
 の時、鼓  
 の取、鼓  
 たて、鼓  
 暫く、鼓  
 つと、鼓  
 年、鼓  
 憶、鼓  
 けた、鼓



時計台（鼓楼）跡

屋 広場の東南側には五階建の高層建築が建ち、  
 上にも針もなく役立つていない貧弱なものだ。歌  
 にもまで唱つた鼓楼は何んと貴重で厚さがあつ  
 かと、慕情が一段と強まつてきた。  
 て、兵馬惚の合い間に赤い灯・青い灯にひかれ  
 つたのであろうか。霧のような細かい水滴を我  
 が肩に一杯うけながら、書店街へと足は自然に  
 向いて行つた。  
 若い日本女性の屯していた十四・五軒もあつ  
 たカフエー街は、全く寂れて僅かに三・四  
 軒の本屋だけが眼につく、文字通りの哀れな書  
 店街に逆戻りしてしまつて右折すると、日本人  
 小学校の街の北に突き当つて隊本部に通じていた。今  
 も尚その通りの道路だ。  
 らねて若人達の手招いていた日本の芸者置屋や  
 半島人の遊郭だつた通りである。その色街は今  
 では荷車の上で野菜を売る百姓の、貧しい影だ  
 けが見える街に落ちぶれていた。  
 恋慕の心を駆りたてて夜明けから通り過して  
 来た街並はすつかり荒廃し、兵(つわもの)ど  
 もの夢の跡はもぬけの殻であつたが、時代の波  
 に逆らえず誠に皮肉といえは皮肉な事である。

漸く小糠雨も上り、折返して鼓楼の跡まで引  
 きかえつてみると、丁度この広場から幾分か  
 のバスが向  
 田舎に出発  
 つて行くつ  
 してどころ  
 だつた。中  
 今日では  
 古都の中  
 心地から  
 乗車でき  
 るほど交  
 通が発達  
 し、料金  
 は至つて  
 安い。一  
 開封一鄭  
 州間で一  
 円五〇銭  
 である。一  
 日日本に  
 して二一  
 七円だ。一  
 がら食生



京吉橋  
 書店街(旧カフエー街)向側遊郭街

活は改善されておられない。朝食を戸外で食べる風景は各所で見受けられ、其の食事の質も相変らずの物ばかりである。那服装も亦、往時の方がカラフルで、懐しい支那人達だけの専用となてしまつたようだが、雲南で見かけなかつた「纏足」にもお目にかかつた。南北朝ごろから一般に行われた因襲だが、何才ぐらいの年輩だらうか。すべてのものが胸を衝く夜明けの開封の姿は、万感肺腑に迫る思いで独り私を彷徨わせて、馬革を以て屍をつつむと決意した當時を一段と恋しくさせたのであつた。

何故にむせぶか胡弓の響  
更けて淋しい省府路

君と別れた鼓樓の下で  
今日もアカシヤの花が咲く

誰を待つやら大路の角に  
一人ただずむ時計台

恥かしいのか夕焼空に  
染めて紅さす丸い顔

今では此の歌詞のような情緒は全く失われた  
（開封小唄一・二）

が誠に口惜しいことである。

## 第六 開封画院（二日目）

我々一行は朝食を終えて開封画院に案内されたが、当時は此のような画院があつた記憶は思ひ出さず事ができない。最初、目に止つたものは、疊一疊ほどある絹に古都を描いた絵で、しぶい此の絵は前宋時代の写しであるうか。一人の画家が何ヶ月も要する大作ぞろい、咽から手の出るほどの逸品ばかりだ。勿論私の手にとどく範圍の価格ではない。次々と汚い室が続き、字を書いている所、或はぶどう、ぼたん、ふじ等を描いている室や、屬子に書画を書いている部屋など専門にくぎられていて、我々の眼を楽しましてくれた。そして開封に此のような文化面があつた事も、初めて識つたことである。パンフレットには、北宋時代の開封書法、絵画、捺染等の技術は中国の最高峰で、解放後もこれらが再び大発展したと記述されている。画院の隣りにある小学校は実に奇麗な建築で、子供達は笑顔で愛嬌を振りつけてくれたが、我々も初めての破顔の微笑で応対したのであつた。昔の日本人小学校は現在改築中だ。当時の開封の在留邦人は約一万人で、盛大な運動会に招待されて可愛い児童と戯れた想い出を回想しながら、書店街へと進んで行つた。



。私はは書店の北端で我々一行を下車させた  
 味。いなが、何回漫歩しても飽くことを回想し  
 たが、街並である。飽くことを知らない過去  
 を持つ。街並である。飽くことを知らない過去  
 、恐らく人によつては書くことのできない或は  
 だ、話せない逸話も多いことだ。戦陣の若武者達  
 の青春街だつたのだ。あはれは〇〇跡、ここが〇〇だ  
 つた。話しながら、惚れ惚れしているように歩  
 く姿は微笑ましい情景だ。多分全員の人が若  
 さを取戻したように心が弾んだことだろう。私  
 がよく戦友と入つた「祖国」の建物は少しも変  
 つていない。今は誰が何をしているのだろうか  
 と思いたない。今は誰が何をしているのだろうか  
 と寂れた。馬道街から鼓樓跡の広場を真直ぐ通り  
 抜ける。と馬道街だ。昔は汚い小路で余り足を踏  
 み入ればなかつた通りだが、今は開封銀座となつ  
 て道幅は三倍以上に拡張されている。丁度相国  
 寺・開封寶館の東側の道路で、百貨店や友誼商  
 店、映画館等が續いていて、日本の田舎町のシヨツ  
 百貨店と名ばかりだ。生活レベルが低い  
 ピングセーター程度もなく、生活レベルが低い

ことを証明して陳列してある商品は日用  
 金物と衣服・布地等が主の貧弱な物ばかりで、  
 我々の国の政策として「ほしがりません。中国の現  
 状は」の式であつて、耐乏生活に慣れさせないで  
 は、等には左程苦にならなないか、揚げ物をあ  
 彼等には変らず銀座の真中に、揚げ物をあ  
 いる。あいつらね、買わない人まで黒山のけ  
 ようにたかつておる。眺めて満ちている光景  
 は伝統的なのである。しかし我々は汚らしくて食欲は  
 湧いてこない。しかし我々は汚らしくて食欲は  
 女の楽しみは此の二つだ。テレピの見られ  
 ない人民の娯楽として料金は至つて安い。二  
 三十銭（日本円で三・四十円）が相場だ、  
 では何錢で見られるようだ。が相場だ、  
 で外国人相手の友誼商店は閉つていたが、私が  
 顔をのぞかせるのと電燈をつけ愛想よく入れてく  
 れた。此の地は「開封玉」の本場で、一度見た  
 いと前々から希望していたのである。ここで研磨するか  
 （玉は開封にはとれないが、ここで研磨するか  
 この陳列品も画院と同様、高価な物ばかり展示

る変過四のてと十年で上い指にてま内み各ら問較城たいと。され  
 毎化し昔のいるわれ昔。策はてを外しの城も。なと比、め  
 心に見、経やもれ昔。策はてを外しの城も。なと比、め



開 封 銀 座 の 馬 道 街

。それ私には齒がたたない値段が付けられ驚嘆に値す

がこんな感じ易くなるのだから。それにしても胡弓の音も聞くが風景が見られない。イでついでいた支那の姿を残して行つたのは叙しく、一人勝手の想いで街を徘徊して行つたのである。

第八 火車站

我が聯隊將兵の中で開封駅を知らない人はなく、途に就いた親しみのある所である。内地から征、我が隊は下車した満期除隊と南冥の果てに、彼方に発つた開封駅は、人それぞれ深い想いの残してゐる。心をとめて、何十年も通訳は駅へとバスを走、出た。私に消えても、何十年も通訳は駅へとバスを走、我々の心を汲んでくれた。何十年も通訳は駅へとバスを走、た。私に消えても、何十年も通訳は駅へとバスを走、たら。私に消えても、何十年も通訳は駅へとバスを走、風堂々たる豪華な建物だ。旧駅舎の五倍ほど威、ある。雨か。位置は昔と変わらない。雨具の、大粒の雨が。位置は昔と変わらない。雨具の、用を。位置は昔と変わらない。雨具の、躊躇して。位置は昔と変わらない。雨具の、心の深い懐かしさがあるのだ。雨具の、引かれるように作戦行動に出陣した。雨具の、

つと絵の、一スどにで義 あせをく徴開作い画壁て片はを  
 て引がた殺切設サ売はの社るた静我し封はるか一いる方あるき  
 見き一め風な備一店構中会。の視が、を古大れ杯るのるつた  
 えた段に景くはじな内国主 でき目暫象都力てに。壁だた

にる。駅構内一方の広さは日本の大都会ぐら  
 はう。逆巻く大黄河の濁流の絵が画かれ、



開 封 駅

たの駅前も知れない。代つて飲食物は根性がないが  
 何十台を値切つた。暴を極めた影を残し  
 が洋車思い出された。往時の極めた影を残し  
 懐く。兵場の正面。民家は往時の極めた影を残し  
 しい。兵場の正面。民家は往時の極めた影を残し  
 ついて。兵場の正面。民家は往時の極めた影を残し  
 駅か。南門に通じる道路。左側には革命記念塔が建  
 である。暫く進んで西側を問はず。今も尚し煉  
 瓦造りの建物。電報局。大陸の事。学。試験。合。格。報  
 私。の。裏。に。ひ。ら。か。い。話。局。だ。と。明。か。し。今。も。尚。し。煉  
 を。使。う。訳。に。も。ら。か。い。話。局。だ。と。明。か。し。今。も。尚。し。煉  
 若。母。に。内。地。に。還。か。い。話。局。だ。と。明。か。し。今。も。尚。し。煉  
 一。回。に。利。用。し。な。か。つ。た。事。は。自。己。の。歴。史。の。証。拠  
 残。る。開。封。は。各。々。に。つ。つ。て。は。自。己。の。歴。史。の。証。拠  
 である。の。進。んで。行。つ。た。バ。ス。は。南。門。に。近。づ。い。た  
 右。側。に。あ。つ。た。慈。父。と。慕。う。湯。口。隊。の。宿。舎。は  
 如。何。な。つ。た。か。と。視。し。な。が。つ。て。速。さ。れ。て。見。え  
 ない。友。の。次。ぎ。の。減。る。と。な。つ。て。更。に。懐。古。の。想  
 が。重。つ。て。き。た。の。で。あ。る。な。つ。て。更。に。懐。古。の。想

第九 離別

激動した戦後の生涯を生きのびた防人たちの  
 夢にまで出てきた開封。漸く念願が叶つて実現  
 した訪れは、あゝという間に過ぎ去ろうとして  
 いる。二日間の古都巡りを終え、中卒を残すの  
 みとなつた私には概ね其の目的を達成し、幸福  
 感にしたりながら二日目の夜を迎えた。そして  
 此の模様を戦友諸兄に伝えたいと、薄暗い電燈  
 の下で便りを書き続けたのである。薄暗い電燈  
 大陸に雄飛した当時の多感な情熱は再び燃え  
 ず、時世の移り変りが沁々と感じてくるのだ。  
 それにしても敗戦の惨状を乗り越えた日本の威  
 大さを、時と場所を変えた各面で感受した。此  
 の事は全く私の直感的な推定だが、日中の落差  
 は三十五年以上であらうと、日本人に生れた幸  
 の中でペンを走らせていた。日本人生れた幸  
 開封三日目の夜が明けて清々しい空気を胸の  
 底まで吹い込んだ。忘形の交りをかわしたとも  
 云える一行は、古城に離別の情を込めて東門に  
 案内された。我々を取り巻く総てのものから隣笛の声を聞  
 くような情が込み上げて来た。こうして訪れた  
 開封の春も、我々が去つて行くのと同じように  
 去つて行く運命だ。果して再び足を運ぶことが  
 あるだろうか。逢うは別れの始めというが、離

別しなればならない事は悲しいことだ。  
 「又一新」という支那料理店をどつた  
 。簡介(簡単な紹介)。パンフレット)には由緒  
 ある中国菜(料理)と宣伝している。開封風味  
 と題して四軒の名前があげられ、其の一つの料  
 理店が又一新だ。色彩は鮮か、肉はやわらかく  
 、味と香り豊かな鶏や鴨子卵、黄河でとれた鯉  
 は新鮮で肉は黄金色だと絶賛して書いてある。  
 「食前方丈一飽に過ぎず」。席の前の食卓は  
 一丈四方もある。その上に料理が一杯ならべら  
 し、山のよう。甚だせいな沢も其の一部で人間は満腹  
 し、山をしまし。甚だせいな沢も其の一部で人間は満腹  
 うを惜しむ。甚だせいな沢も其の一部で人間は満腹  
 れを二泊三日の開封は過ぎれば誠に短時間の訪門  
 だつたが、故郷というか溫柔郷ともいえる此の  
 街は、我等二一九会の者にとつては生涯忘却で  
 きない古都なりと、再び強烈な印象を与えてく  
 れたのである。

鈴が鳴る  
揺れる花かご

馬車が続く  
嫁御寮

開封恋しや  
嫁御十六

主なお恋し  
シユスの靴

(開封小唄第五節)

第一 歴史上の中牟

名実ともに背水の陣であつた橋頭堡を、水火を踏む思いで死守した中牟城は、大黄河の南、開封と鄭州の中間に位置している。周圉に約三つの城壁を擁し、開封府下の十一県の一つであつた中牟県の県城である。

歴史的に余りにも名高い開封の陰に隠れているもの、其の衛星都市として発展し、由緒ある古い歴史があつたものと推察できる。

其の第一の史実と考えられる吉川英治の「三国志・第二卷（群星の巻）」。「偽忠狼心」の一部を是に記載する。

「曹操」……一五四、二二〇

後漢末の英雄で本姓は夏侯。

「董卓」……

董卓は孟徳。黄巾の乱の討伐にて功を立てる

献帝を擁して魏王とも称し、北方を平定して江南の兵、四川の蜀漢と天下を三分し、そのうち最強であつた。

吏事……役人

曹操をからめよ。布令は、州郡諸地方へ飛んだ。その迅速を競つて。

一方、洛陽の都をあとに、黄馬に鞭をつづけ、日夜をわかつた。南へ南へと風の如く逃げて来た曹操は、早くも中牟県（河南省中牟）開封鄭州の中間の附近までかかつていた。

「待てつ」

「馬を降りろ」

関門にかかると、彼は関所の守備兵に引きずり降ろされた。否、彼は関所の守備兵に引きず

り先に中央から曹操という者を見かけ次第召捕れと、指令があつた。その方の風采と、容貌とは人相書に甚だ似ておる。

関の吏事は、そう云つて曹操が何と云いのがれようとして、耳を貸さなかつた。

「とにかく、役所に引ッ立てる」

兵は鉄桶の如く、曹操を取り囲んで、吟味所へ拉してしまつた。曹操を取り囲んで、吟味所へ

関門兵の隊長、道尉陳宮は、部下が引ッ立てて来る者を見ると、曹操だ！吟味に及ばん」と一見して云

いきつた。

「そして部下の兵をねぎらつて彼が云うには、  
「自分は先年まで、洛陽に吏事をして居つたか  
ら、曹操の顔も見覚えてゐる。」「幸いにも生け  
どつたこの者を都に差立てれば、自分は万戸侯  
という大身に出せしやう。」「お前たちにも恩賞を  
わけてくれるぞ。」「前祝いに今夜は大いに飲め」  
そこで曹操の身は忽ち、かねてから備えてあ  
る鉄の檻車にほりこまれ、明日にも洛陽へ護送  
して行くばかりとなし、守備の兵や吏事たちは  
大いに酒を飲んで祝つた。」「  
日暮になると酒宴もやみ、吏事も兵も関門を  
閉じて何処かへか散つてしまつた。」「曹操は最早  
、観念の眼を閉じている者のように、檻車の中  
によりかかつて、真暗な山谷の声や夜空の風を  
黙然と聞いていた。」「  
すると、夜半に近いころ、  
「曹操、曹操」  
誰か、檻車に近づいて来て、低声に呼ぶ者があ  
つた。」「眼をひらいて見ると、屋間、自分を一目  
で観破つた関門兵の隊長なので、曹操は、  
「何用か」  
「おん身は都に在つて、董相国にも愛され、重  
く用いられていたと聞いていたが、何故に、こ  
んな羽目になつたのか」

「くだらぬ事を問うもの哉。」「燕雀なんぞ鴻鵠の  
志を知らんやだ。」「貴様はもうおれの身を生け  
どつてゐるんじやないか。」「四の五の云わずと都  
へ護送して、早く恩賞にあずかれ」  
「曹操。君は人を観る明がないな。」「好漢惜しむ  
らく」という所か」

「怒り給うな。君が徒らに人を軽んじるから一  
言酬いたのだ。」「かくいう自分とても、冲天の大  
志を抱いておる者だが、真に、国の憂いを語る  
同志もない為、空しく光陰の過ぎるのを恨みと  
しておる。」「折から、君を見たので、その志をた  
たきに來たわけだが」  
意味ありげな言葉に、曹操も初めて態度を改  
めて、  
「然らば云おう」と、檻車の中に坐り直した。

二

曹操は、口を開いた。  
「なるほど董卓は、貴公の云われるようにこの  
曹操を愛していたに違いない。」「然しそれがし  
は、遠く相国曹参の末孫にて、四百年來、漢室  
の祿をいただいて來た。」「なんで成り上り者の暴  
賊董卓ごときに、身を屈すべきや」  
と語氣、熱をおびて來て」

「如かず国の為、賊を刺し殺して、祖先の恩を報ずべしと、董卓の命を狙つたが、天運いまだ我に非ず！こうして捕われの身となつてしまつた。なんぞ今更、悔いる事があるうか」  
白面細眼、自若としてそう云う容子、さすがに名門の血すじをひいているだけに、争い難い落着きがあつた。

「……」

黙然！やや暫くの間、樞車の外にあつてその態を見ていた関門兵の隊長は、

「お待ちなさい」

云うかと思つと、樞車の鉄錠を外して、扉を開き、驚く彼を中から引出して、

「曹操どの。貴君はどこへ行こうとしてこの関門へかかつたのですか」

「故郷！」

曹操は、ぼーとした面持で、隊長の行為を怪しみながら答えた。

「故郷の譙郡に帰つて、諸国の英雄に呼びかけ義兵を挙げて再び洛陽へ攻め上り、堂々、天下の賊を討つ考えであつたのだ」

「さもこそ」

隊長は、彼の手を曳いて、密かに自分の室へ請じ、酒食を供して、曹操の姿を再拜した。

「思うに違わず、御辺は私の求めていた忠義の士であつた。貴君に会つたことは実に貴ばしい」

「では御身も董卓に恨みのある者か」  
「いや、いや、私怨ではありません。大きな公憤です。義憤です。万民の呪いと共に憂国の怒りをもつて、彼をにくみ止まぬ一人です」

「それは意外だ」

「今夜かぎり、てまえも官を棄てて此関から奔ります。共に力を協せて、貴君の赴く所まで落ちのび、天下の義兵を集めませう」

「えつ、真実ですか」

「なんで嘘を。！すでにこう云う前に、貴君の縄目を解いているではありませんか」

「ああ！」

曹操は初めて、回生の大きな歓喜を、吐息にも、満面にも現して、

「して、貴公は一体、何と仰しやる御仁か」とたずねた。

「申しおくれしました。自分は中牟県の関門の隊長をして、陳宮、字を公台という者です」

「御家族は」

この近くの東郡に住まっています。すぐそこへ参つて身支度を代え、直ぐさま先へ急ぎませう。

陳宮は馬を曳き出して、先に立つた。

夜もまだ明けないうちに、二人は又、その東郡をも後にすて、ひた急ぎに落ちて行つた。

：三日目に河南省衛輝附近の父の友人の「呂伯奢」を訪れ、再起して行く。以下略

呂伯奢

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

以下略

## 第二 中牟訪問の意義

近年、中国孤児の肉親をたずねて、日本を訪れる記事があつた。彼我ともに幾多の犠牲を強いられた戦跡を訪し、戦跡の急も思えた激しい過去を振り返ることは、中国孤児の心情と変るところはなく、歳月の遠ざかるほど募つてくる。往路に見えない景色が帰路に見ることのできる、往復して初めて完全な旅となることと同じく、人生航路も亦、往路の若い年代で感じなかつたことが、帰路の若い年代になり、しみじみと味えるようになる。心地在るものと思ふ。其の心象が現地慰霊となつて現れるものと、思ふ。人の一生は短く、一炊の夢にすぎなかつたと悟り、生死を俱にして異域の鬼となつた亡き友の面影が、慕われて来るのは当然である。霊が存在するのだと説かれ、永遠の未来をもつた無量寿の命だと論されるとき、現地の一木一草にも靈魂が宿つてゐるのだと心をとめるのである。心の中を去来し、ここ三年の間、その心の中を去来し、今ここに中牟の土を踏みしめて慰霊が叶えら

れたことは、私にとつては意義深いことであり、漸く戦後が終つたといふ安堵感を覚えたのである。

## 第三 大黄河の跡

開封料理に箸を運びながら我が想いは、廢墟となり死の街と化した中牟に走つていた。今次訪中の目的は、この地の慰霊に過ぎず、逸る心を抑えることができない。鄭州街道を中牟に向つて驀進を続けた。最先頭の座席にすわり鶴の目、鷹の目というか、血眼になつて前方を見つめてゐると、殷々たる鳴動を響かす炸裂音が聞える。錯覚に陥つてくる。当時の開封に出張して陣地の安否を気遣う心境に逆戻りだ。雲霞の如く衆敵が狂気のよう射ちまくる轟音の中で、隠忍自重、戦機を窺ひ、突如として全力を急襲して戦つた凄惨な状況が、眼底に映る。簡易鎗装された直線街道は、整然と三列に並んだポプラに覆われ、広大な畑の麦は二〇糎ほどに伸び、菜種の花は真盛りで所々に咲いて、桃の花と調和し、美しい農村風景は裕福そうに面目を一新している。砂丘地、路床が街道から遠く離れ微かに見える。



高く新設された隨海線、人力やる馬の引く荷車、大陸風情が万点の日干煉瓦造りの田舎部落、新旧入り混つた光景が映画を観るように展開して行く。

往路で大体の概要を把握した感覚から、中牟近しと思つた丁度その時、高く聳える煙突が数本ちらりと樹木の隙き間から網膜をかすめた。往きには気がつかなくつた煙突だ。なんと中牟は工業都市に發展したのであるうか。懸命に見え隠れする変化を見逃さないと眼差を充血させ、小さな起伏にも神経をとがらせた。

疾走して行くバスの中から旧隴海線の跡が眼に入つた。愈々中牟だと緊張し顔面が真赤になつて来た。線路の路盤は四十年前と変らず余り盛り上つていない。昔のままだ。多分この辺りが旧中牟駅跡ではない。昔のままで思つた途端、バスは干いた黄河の河床を渡つていた。

ろ、凹地となつた流れの跡は幅約一五〇米位である。今は干し上つて乾燥した低地に過ぎない。河床は傾斜した農地となり、それらを含めて河床の幅は三〇〇米ほどか、それもなからず、一条面の植林のため眺望は意のままにやらず、一条

の水の流れただけが陽の光を受けて、白く反射しての彼の悠々たる流る。久の大黄河は、幅員三十米程となり、水の遺物のようになつた光景は誠に物寂しいことである。一粒の砂のにも中牟の歴史が、刻まれた水、一較龍水を、神立つれば力を奮起した将兵の辛苦が



大黄河の跡

の水の流れただけが陽の光を受けて、白く反射しての彼の悠々たる流る。久の大黄河は、幅員三十米程となり、水の遺物のようになつた光景は誠に物寂しいことである。一粒の砂のにも中牟の歴史が、刻まれた水、一較龍水を、神立つれば力を奮起した将兵の辛苦が

浸み込んでいいると思つと、飛び降りて頭から砂をかぶりたいたいほど、肺腑をえぐられた。

#### 第四 慰靈

（次頁要函参照）。黄河の河床を渡ると工場の煉瓦塀に突き当る米ほど進むと、道路は工場の塀に沿つて南へと延びている。鬱蒼とした木陰の三又路に出た。何回となく方向変換すると方向が眩惑されるものだが、古巢の土地感はお兵となつた今でも間違ふことはない。大樹の茂る此の三又路は概ね中牟の東側だと判断がついた。我が鼓動は一段と早煙突群を望遠して以来、我が鼓動は一段と早鳴つた。此処を青山の地と定めて陣地に張りつき、武装のまま眠り戦い続けた戦友の姿が、彷彿として偲ばれてきた。

人間万事塞翁が馬とはいえ、不幸にして不帰の客となつた多くの靈に對し、拙劣な指揮官としての悶々たる情が重圧となつてくる。このように締めつけられる胸中では、過去二回の慰靈訪問に於ても体験したごとだ。過去二回の慰靈訪問に於ても体験したごとだ。過去二回の慰靈訪問に於ても体験したごとだ。

早速、昨年五月、四国・八十八ヶ所巡礼で押印した白衣をばり、首には袈裟をかけ、数珠を手にして拝礼の姿に衣替えをすると、少しは心の余裕が湧いて来たような氣持になつた。

日本から持参した「線香」。「ろうそく」。「菓」。「神」。大阪空港で求めたナポレオンを子。バックから取り出して、自分ながらの慰靈の準備を整えて待機したのである。

中国国際旅行社の郭林山氏はバスを三又路で停車させ、一人下車して中牟の民衆と話をしている。前以て私は中牟の城内に案内をしてくれるように依頼しておいたが、彼は城内の場所を確認しているようだ。然しながら、附近一帯を眺めても城壁はなく、黄河の汜濫で崩壊したのか或はあの瓦礫の市街と共に取毀したのであるうか。洞上の高地、廟の高台が見えないかと胸騒ぎしても、繁つた樹木や建物が見えて見透しがきかない。

何として四十年の歳月を経た今日、いくらか一々な中国でも変化することは当然だが、何ぞ一つでも見覚えのものはないかと、油汗が出るほど真剣に捜した。

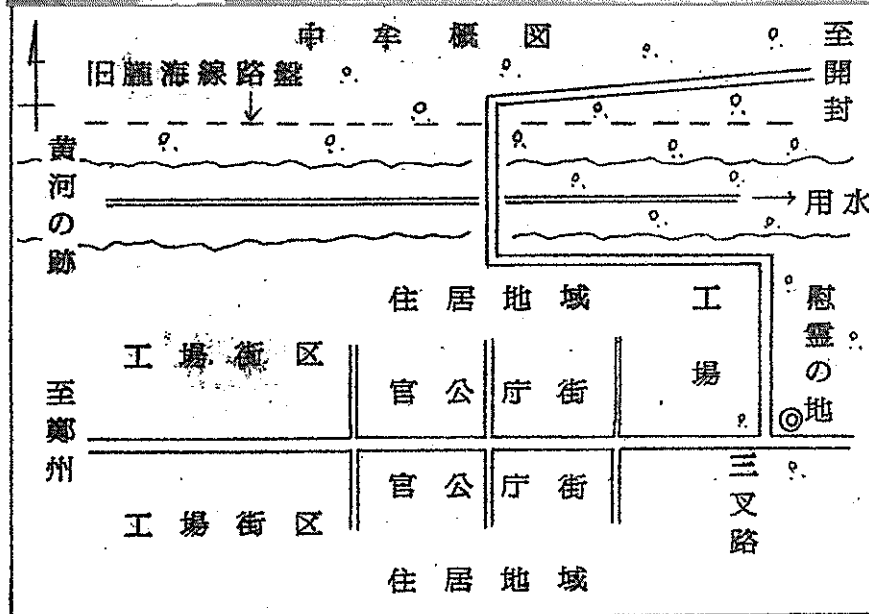
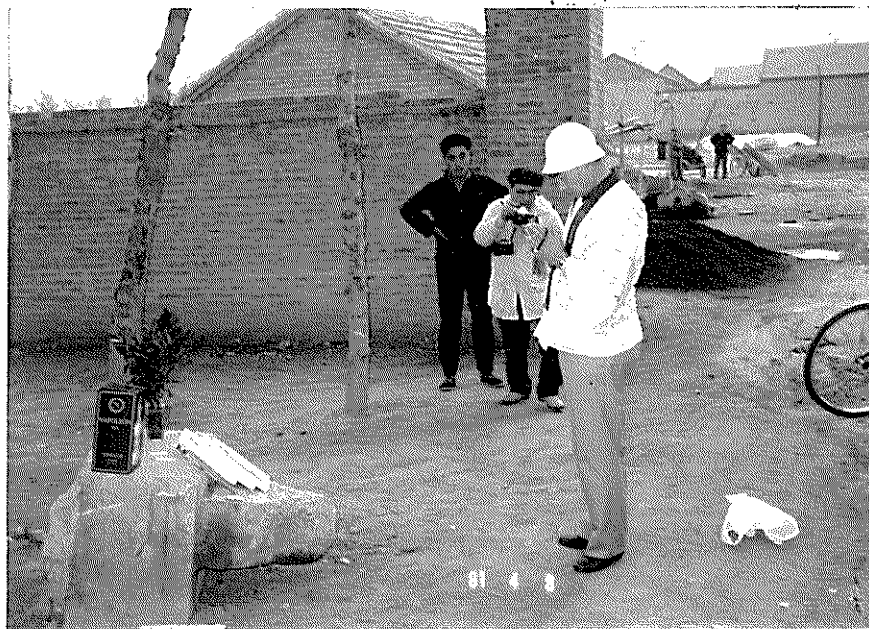
幾千里の彼方から訪れて、戦友を代表して現地慰靈を申し上げた熱い涙も、流す場所の確認に一苦労である。

余暇をもちあます民衆は瞬時に群衆へと膨れあがり、異様な姿の私の周囲をとり巻いた。そこへ通訳が何人かの古老達から現地を確めて帰つて来た。

「此の三又路が旧中牟城の東門跡」であると

確認されたのであった。

お供えをして慰霊する筆者



と、当時は中牟隨一の堅固な城門だった事を思う  
と、全く信じられず想像  
でしまたが、黄河の地  
形から判断すると納得  
できる位置だ。準備に  
と直ちにかかると、我  
を汲んでくれた待ち構  
え壇といたかのよう  
祭壇に据えられた石  
路傍に酒・菓子供え  
。柵・酒・菓子供え  
て線香に火をつけ  
うそくを灯そうと  
ところ、日本旅行社  
の添乗員は現地の人  
悪感を抱かせたから  
大至急にと催促した  
だ。心を静めて今  
といふ時に何たる暴  
身のう。第一機関銃  
に手伝つてくれ  
最中だ。通訳でさ  
同中国の通訳でさ  
承諾をして好意を示し

承同 最に 身に だとい だと 大至 悪感 のと うそ てる 路傍 祭壇 えて をと と直 形か もな 城門 だつ た事 を思 う  
承同 最に 身に だとい だと 大至 悪感 のと うそ てる 路傍 祭壇 えて をと と直 形か もな 城門 だつ た事 を思 う  
承諾をして好意を示し

拘らず、何たる妨害的な言葉を吐くのかと、心  
の中が煮えくり返る思いであつた。大挙して盛  
大な慰霊祭を催す訳でなく、私人の静かな祈  
りが何故に悪感情を与へるのだと云いたい。祈  
り日本人戦死者之霊という位牌を掲げたに非ず  
、又私の慰霊は比重的な差はあつても、日本の戦  
友ばかりが目的ではないのだ。我が方に数倍す  
る中国の犠牲者の慰霊も含まれ、先哲達の心  
一步でも近づきたい平和を願う一心である。中  
國人に喜ばれこそすれ、恨まれるものではない  
。若い世代の彼が我々の訪中の真意を弁えず、  
物見遊山が主など心得ているとすれば、添乗  
員の資格喪失であり、世が世であればと嘆くは  
かりだ。真心を込めて慰霊を始めようとしてい  
る若者に対し、心静かに協力する事が人間であつ  
て、冷酷非情の振舞は断じて許す心にはなれず  
、現代若者に警鐘をならしておきたい。

### 慰霊開始。

恭しく求道僧のような身なりで合掌した。命

よりも名を惜しみ、一擲乾坤を賭けて死闘を演

じた数々の断片が、黙念する中に次々と網膜に

映つて来た。

絶地の陣の橋頭堡を枕に、虎の尾を踏むよう

な恐怖と心の憂危を克服し、身を挺して中卒死

守の任に邁進し、悲しい哉、遂に散華された

御霊に対し「寺前が今ここに、お弔いに参りま

した」と報告をして恭しく頭を垂れたのである  
。日中国交回復を機会に、白髪のお詫びと、自賣の  
参りたい一念であつたが、白髪のお詫びと、自賣の  
十年後の今日までも遅延したお詫びと、自賣の  
念で胸がつまる思いで念仏を唱えた。  
中国人の犠牲となられた霊魂に対し、お悔みを  
申し上げられた事に自らを慰めたのであつた。  
瞑想から覚めると好奇な眼を注ぐ群衆は更に増  
加していた。  
東西南北に向つて拜礼し心を鎮めて黙禱をつ  
づけ、極限状態に身を曝した當時を想い浮べな  
がら、このように誠に短時間の現地慰霊であつた  
が、誠意は時間の長短に非ずと心を込めて終え  
られた事は、幸運なことだつたと感謝しなけれ  
ばならぬ。私の生涯を通して忘れられない事  
になつたのである。

### 第五 今昔の感

菜の花の咲いては散つた陽春は、あれから度  
を重ねること四十回にも及び、古戦場の様相は  
激しく移り変つて別世界となつてしまつた。  
は、死神の血のささやきのように感じたまつた。  
山、今は青々と緑りに覆われて復興して瓦礫の山

無人だつた街には活気が溢れて、全中国の共通の悩みは人口過剰が此処でも見られるようだ。慰霊には限りはないが自分なりの細やかな勤めを終えた時、東門一帯の煉瓦を取壊して此の北側にある工場の一部を造つたと聞かされた。古者は話を続け、中牟には日本軍の築いた大きなトチカが幾つもあったが、永年の黄河の氾濫で崩壊して取除いたのだと、郭氏が通訳をしてくれた。戦いから比べれば、我々が体験した魔の濁流との戦いから比べれば、二十倍の星霜が経過しているのだ。然し、威大なトチカ群の存在していた事が老人から若者達に伝えられ、中牟の激戦だつた様子が語り継がれていることは、或種の満足感と云うか快感と云うか、その身になつた人にか感じないものを与えてくれた。不思議な自尊心か自惚かも知れない。私の慰霊を待つてくれたバスは再び西へと出発した。東門の跡が限りなく恋しい。暫くの間とはいえ一行の中で、単独ではあつても慰霊を勤め得たのは私だけであつて、誠に僥倖だつたのだ。再会の地の此処が恋しい筈だ。運転台の横に立つと、五感を研ぐように極度の緊張が高まり、変貌した街の姿を写真におさ

め、脳裏に焼き付かせようと身は硬直し、我を忘れて顔を紅らませ、吐く息までが荒くなつて来るのが分るぐらいた。最初の十字路の北の通りを眺めた瞬間、遠く少し高くなつた地形が眼の焦点に入つた。しかしバスはスピードをあげて突つ走りシヤッタしをきる暇がない。残念だ。稍稍道幅が広くなつて小高くなつた場所には北門の所ではなかつたか、と想像をしたが現実的ではないようだ。一部中牟の地形については微に入り細く入り、一部的にもわからぬ。角に東西に通じる道路は一本のよう、これに直角になつて走る南北の道路は二本か見えた。角にメンストリートの中中央に「中牟県人民政府」があり、「中牟県化工機械」を始め官公庁や工場群が西へと続いていて、工場労働者用のアパートや一般の民家は町の外郭に建つていて、中牟の東西は二軒、南北は一軒ほどではなかるうか。このように面目を一新した中牟は旧城内以上に膨張し、政治は勿論のこと工業・農業都市に變化した。しかし当時のような豪華な建物や趣のあるものは見当らず、社会主義国の原則に副つた再建の姿であり、今昔の感がする。

息つく暇もなくシヤッタ―を押しまくり、バ  
 スは素速く通過して別れを惜しむ余裕なし。  
 夢枕に想像した中牟。胃の底から苦汗が込み  
 あげるような兵馬倥傯間の中牟。何れも今では  
 既に幻に過ぎず、四十年の利子に利子がついた  
 如く素晴しい発展だと云いたい。利子がついた  
 中牟の当時の人口は三〇万人だ。四つの現代化政策  
 の推進に依つて地方県庁所在地まで工業都市  
 化が波及し、人民公社が功を奏したのであろう  
 か。其の点は甚だ疑問があるのだ。昨秋の訪中  
 の際に幾つかの人民公社を訪れて、工場・学校  
 ・病院等を見学したが、建物ばかり図体の大き  
 な物を建てて中味がさつぱりだつたからだ。日  
 本ではスクラップにするような数十年も前の機  
 械をならべ、病院は汚くて治療を受ける気にな  
 れない状態であつた。この事から判断をすると  
 中牟の再建も見掛倒しかも解らない。飲食店  
 住民の服装は開封以下の昔のままで、相変ら  
 ずに群がる光景も改善の跡がなく、生活は相変ら  
 ずというところである。勿論、我々が守備した  
 無人の中牟城からすれば極楽の地となつたが、  
 戦争は勝者にとつても敗者にとつても、中牟が殷鑑を示  
 ど無惨で虚しいものはないと、中牟が殷鑑を示

している。  
 歴史の流れは止める事はできず、物を変化さ  
 せて行く事は当然である。しかし過去の歴史を  
 偽つて伝えてはならないのだ。その点から数々  
 の歴史を物語る城壁や、激戦地のト―チカの一  
 個でも、戦争防止や平和の為に残置できなかつ  
 たのであろうか。  
 京都・奈良を爆撃目標から除いた米軍、旧口  
 一マの遺跡を戦禍から守つたムツソリニ―等を  
 学んで欲しかつたと愚痴が出る。  
 過去の遺物は総て悪であり共産主義が最善として、  
 過去の遺物を悉く破壊した事は、かえすがえす  
 遺憾なことであり、破壊した事は、かえすがえす  
 ばならない。  
 中牟は次第に遠ざかつて行く。離別だ。  
 身勝手な思いつきを述べたが、中牟を愛してい  
 るからだ。中牟の皆さん御元気で。  
 「相思い相見ゆ、知る何の日ぞ。」  
 「此の日の世、情を為し難し」(季太白)  
 永遠の別離を告げたのである。  
 この詩のよう、恋人に別れるような心境で



中牟・東門の跡の三叉路か  
ら北へ通じる道路（向うが  
黄河）左は工場

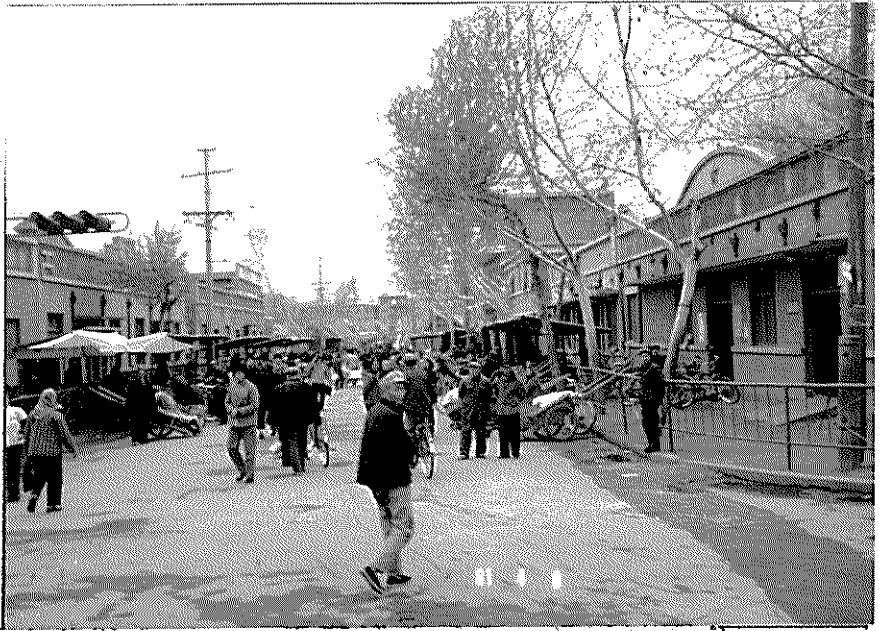


中牟县人民政府



中牟县化工机械厂

中牟中央の市場街



工場



中牟西端、両側は工場群





、唯一の見学場所となつた河南省博物館に案内された。古代歴史部門と革命史部門に分れ、古代部門には河南省で発見された旧石器・青銅器など約一〇〇〇点が大洪水の革命部門では一九三八年の黄河爆破による大洪水の様子が展示されていた。開封博物館がここに吸収された事も知つたのである。

我等が中原の地に陣を敷き、各地に屯して、我が時々の目標は、常に黄河を距てた敵軍の根拠地「鄭州」であつた。故に一兵の腦裏からも消すことのできない存在だつたのである。

開封に次ぐ河南省の憧れの地と思つて来たが、訪中初日、北京出發の延期に依つて予定が大輻に狂い、注目の鄭州見学が全廃されたことは慚愧に堪えない。

社会主義國のずさんな計画に立腹しながら、宿舎の中州賓館に到着し直ちに夕食となる。このような結果、鄭州で記憶に残るものは前記の博物館、ホテル、駅の他に、碁盤の目のように整備された広い道路と街路樹ぐらいた。

是に鄭州の歴史をひもとく事も無駄ではないと考える。

或は「中州」という。河南省に在つて略称は「予省」の中州の名は中原に位置するからで、予省の名は禹貢周礼等における予州の地であるからだ。河南省は其の地域の大部分が黄河の南方に当るためである。

太古以来の中国人活動の中心で中原の地。面積は一六七〇万平方尺。人口は約六千万人。首都は一九七〇年に開封から鄭州に移つた。開封は河南省の東部に偏在し、鄭州は交通に便というところからである。

省の西部以外は殆んど平野にして、土地は肥沃である。黄河に富み、又石炭その他の鉱産も盛ん利建設に努力している。水害が頻繁のため現在水利（但し本年は歴史始つて以来の「干ばつ」に見舞われ、農産物の被害は甚大である。魔の大河らなり、農産物の被害は甚大である。魔の大河らしい）

氣候は大陸的氣候で西北部は雨量は少量。交通は京広・蘭海の二幹線鉄道と稠密な道路網に。よる陸路が主である。農畜産は小麦・高粱・綿花・煙草・落花生・牛革・羊毛皮。鉱産は石炭・鉄・銀・鉛。他に手織布・陶磁器がある。

## 第二 鄭州の概要

河南省の省都。黄河の南方二六料にある。京広線（北京—広州）隴海線（連雲港—蘭州）の交叉点である。

人口は約八〇万（戦争当時一百万）。

農産物の集散地で特に綿花の著名な大市場。

織機・紡績・冶金・化学工業などが盛んで、一

五〇以上の工場と一〇万人以上の工場労働者が

いると云われている。

鄭州は中国でも最も古い都市の一つで、今か

ら三〇〇年以上も前に早くも集落が形成され

ていた。また商代の古城として有名である。

隋の時代の鄭州・滎陽県で、唐・宋時代も此の

ように呼称して金時代から単に鄭州と呼んだ。

由来、開封府の所屬だったが光緒年間には直轄

州となり、滎陽・滎沢・汜水の三県を以てこれ

に属した。

日中事変では、徐州敗戦の汚辱を一挙に挽回

せんとした蔣介石は、第一軍長「胡宗南」を繰

司令官に任命し、隴海線沿線の最後の防禦拠点

として万全を期した。しかし開封を追われた十

数万の敗敵のため、鄭州城内の重要建築物は十

べて焼却されたため、鄭州城内の重要建築物は十

でめに黄河を決壊して日本軍の追撃を阻止したの

初 解方後の一九五八年に毛主席の指導により、  
又 市の北方に邙山・黄河揚水ステーションがあ  
る。霸王城も一角だと思おうが見学がでなかつ  
た事は残念である。

## 第三 纏まりのない想い出

は、中国国際旅行社鄭州分社発行のパンフレット

掲載されておらず、河南省全域の説明文に過ぎ

ない。鄭州は都が置かれた所では無いから、見

学すると、龍亭。洛陽の龍門石窟。白馬寺。安陽

の文峰塔。輝県の百泉等が写真で紹介され、鄭

州は紡績工場の内、一枚だけ掲げられてはいる

。我々の願望は勿論、名所旧跡の見物ではない

、第一目標としては、王城及び黄河であつたと

水一升に土一升（平均して37%の黄土を含むと

いわれる）を運ぶ流れに手足を浸し、回想した

かつたのである。

中州賓館に到着し暫くロビーで休憩した時だ

が、中牟に於て四十年振り「葉二重餅」をた

感謝の意味で、供物に菓子「羽二重餅」をた

四名の通訳達にお裾分けとして差し出した。

か

か

の許な国事のさ態す好ての。ある万時ねも進た度たな。のな  
 昨ださ役でだ良れ度る意は者自由。の里とはつま「「はくなくあ  
 秋ろれ得はがくてとよを、に由。のの差雲たわと大驚な、つ誰  
 雲うなで些、な感見う無人と陣 差雲たわと大驚な、つ誰  
 南かいも細中いじななにのつ營 で泥往ず所人い態かた一人



鄭州の街路

一人として受け取らず無下に拒否した。  
 「渴しても盗泉の水を飲まず」式

の旅ではこのような頑迷な事がなかつた事か  
 うと、綱紀肅正の点で何かあつたのであるか  
 不思議にも昭和初期のソ連の状態に似てい  
 る。うだ。社会主義の夜は屋外に出ると思  
 なく、暗闇の世界だ。退屈しに飲みたい思  
 つても、亀井氏が提供してくれなかったヒ  
 ないも、亀井氏が提供してくれなかったヒ  
 た。向夜の時は、余一行のつれづれに足  
 の向夜の時は、余一行のつれづれに足  
 た。私も象牙の観音像を求めて個室に閉じこも  
 つた。一髪千鈞をひく危険をおかし、中原に  
 の経過を想い起した。私、直屬上司・深井大  
 長を始めた。清水・佐々木・長尾中尉等の面  
 ちらつていた。皆この鄭州や中牟周辺の戦  
 て、近づくにつれて、この鄭州や中牟周辺の戦  
 刻、買い求めたばかりの観音像の招きで  
 は自然に合掌した。この観音像の招きで  
 御冥福を祈る心境にたつた。先輩同僚の靈の  
 強烈に私の脳裏に刻まれたのである。鄭州は  
 現美の足下に在り。薄暗い電燈の下で感傷の胸  
 中を懐古歎英風（唐詩選）

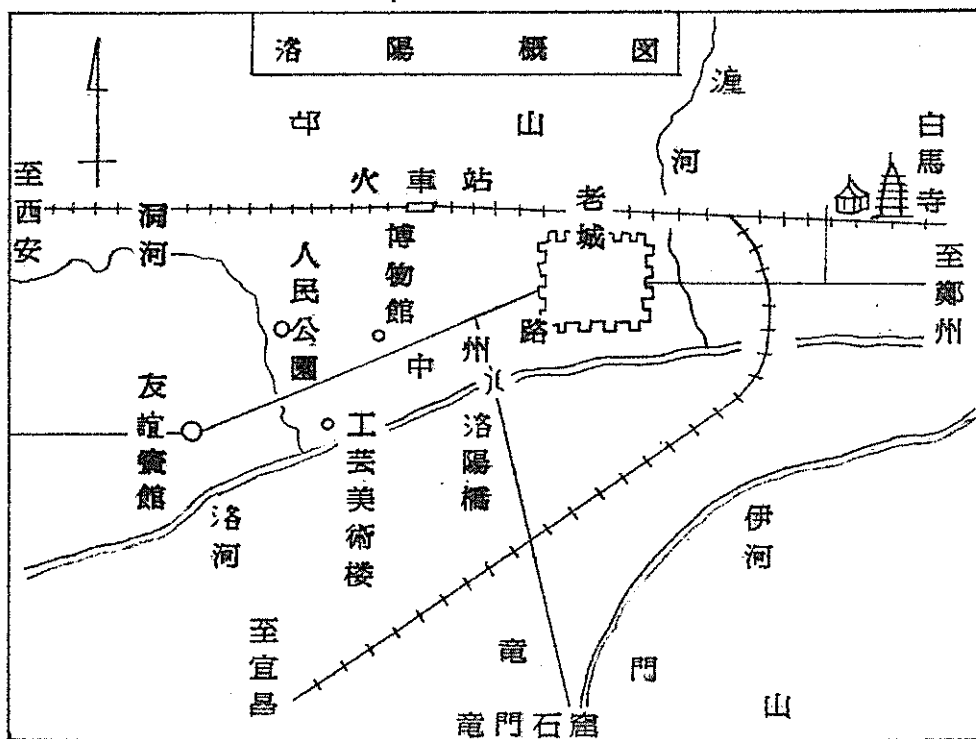
午前八時に鄭州駅を發車してから、約二時間の隴海線の旅で洛陽に着いた。開封や鄭州の名所を知らずして洛陽は識られていた。歴史的に馴染の深いところとして洛陽は識られていた。劉桂香さんから、中国の知識を求めるとして、劉桂香さん。例えは、大学の初任給は四九元（日本円にして七一〇〇円）。家賃は一平方米十一錢（十六元）で大体給料の二割ぐらい。等。漢民族は八〇%を占めていて、私に失業者は二六〇〇万人にも及んでいて、尋ねたところ、本年中に解消すると答えた。勿論、信用できる話ではない、彼女から学習したことは各種の報道によつて、我々の知識の中にあることばかりだ。知りたいた事は思想や人物評だが、それは聞く方に無理があるようである。華国は売りの人物ではないなど、鄧小平一派の受け売りの青年通訳が上層の内部を知り、卒業して数年の青年通訳もあつて、期待する方が間違ひだ。自由

ものがた。通訳の職業に例をとれば会話の下手な人が給料が高いと云うことである。所謂、年功序列型は社会の左右を問わず問題となつていようだが、人が人を支配する社会だから完全平等はあり得ないと慰めた。読み始めた中国古典名言事典を見て、是非その本を欲しいと私に懇願してきた。昨日の菓子を受取らなかつたが書籍は別格なのであろうか。日本人には其の意味がさつぱり解らない。日本には其の意味が贈呈してやる意向だつたが、未だ旅行も日数を余しておき、其の間に読破したい希望を持つていたから、日本へ帰国後に送付すると返答した。その場を誤魔化した。実は離別する時の記念品に渡す心算りであつたのだ。（その通りに北京最後の日に渡す）

自國中国の歴史や古語の知識は語学は堪能だが、つてあり、其の事を自覚して勉強したい心があつてありと見えたのだ。塗炭の苦しみ（書経）や孟子三遷の教え（列女伝）などの簡単な古語まで知らない事が、中国の現状である。それにしても社会主義になつて以来、文字は簡略化し、孟子の教えを始めとして古典までが葬られたことは、誠に嘆かわしいことである。

第一 洛陽の概要

河南省の西部に在る都市で古名を洛邑という。周の成王がここに東都と称し、紀元前七七〇年、周平王が東遷して東周と改め、東漢、魏、西晋、北魏、隋、唐、後梁、後唐など、九つの王朝が都を置いた。この地は伊・洛二水の流域にあたり、嵩山を初めと六大古都の一つである。古都とも呼ばれ、開封と共に南の一隅にあつたが、今では其の外掘りの一部を残すだけになつてゐる。府城は隋・唐時代の洛陽城の東漢の洛陽城は府の東北にあり、府南にある竜門の千仞崖（竜門石窟）は、北魏の末期から唐初期に造られたもので有名である。北魏の末期から唐初期に造られた府北にある北邙山は東漢以来、名門豪族の墳墓地として知られ、府東の白馬寺は東漢の名門豪族の墳墓地から仏教を伝えて建てた古刹で名高い。府の西南にある天津橋は隋時代に洛水の上にかけた名橋で、唐・宋の詩文に其の名が著われてゐる。頻りに繰り返し、所謂、春秋時代を出現した都として、或は伯夷叔育、諸葛孔明、岳飛、文天祥等の忠臣・義人を生んだ古都として知られる。白居易（字は楽天）で唐朝の代表的詩人）も此の地に十八年間も住み、香山寺に住んでいたから号を香山居士といつたのである。



孔子。老子も亦この地で學問をおさめ、三國志の作者陳寿、そして李白や杜甫もこの地で暮らした。各時代ごとに多くの學者や文人達が集つていた。文化都市でもあつた。中原の要衝として南北双方の争うところとなり、しばしば戦禍の巻となつた。國民政府はここを北方に於ける軍事上の拠点とし、広大な飛行場が開設される支那事変でも重要な役割を果したのである。一九四八年三月、洛陽は解放され、當時は面積四・五平方料、人口は一〇万、小さな炭鉱が一つ、小さな發電所が一つ、わずかな手工業しかなく、千載の古城も断垣残壁、荒涼としたものだつたと云われている。現在の市内面積は七九平方料、人口五〇万、新しく建てられた工場は四〇〇余といわれ、鄭州に次ぐ河南省第二の工業都市に發展して、特に東方紅トラツクター工場は有名である。鶴光客数も多いのである。國際旅行社は分社でなく洛陽支社となつていて、パンフレットも日本語で書かれ、二回の訪中で初めて見た第一号パンフレットであり、印象に残つた。

## 第二 柳 絮

洛陽駅には支社の「江」氏が出迎え、一行を

乗せたバスは一路ホテルの友誼賓館へと直行し、広い街路の市街地を通過して行つた。途中、誠に不思議な現象にぶつかつた。綿のようになり、どこまでも続いている物体が空間をうめつくと、どこまでも浮んだ光景には初顔合せで、物珍しい。ホテルの前の中州路も同じ状態で、追いかけて一つ(一ミリほどの種子に一センチ位の白い羽毛が付いている)つかんでみた。通訳に尋ねると一人は「りゅうちよう」だと説明し、他の一人は「ようじゅう」だと云つた。洛陽の人達が口論するところを見ると、日本語に訳す事に自信がなさそうである。「りゅう」という発音から「柳」であることが解り、手帳を出して彼等に書かせてみた。一人は「柳絮」、もう一人は「楊樹」と書いた。何れが正解かは知らないが、誠に洛陽に相応しい風情があり、珍らしい街路樹である。帰国してから早速辞典をひもといて見ると、「柳絮」(りゅうじよ)が正解であつた。柳の実の綿の如く飛散するものの様。と訳されている。「柳絮春雪、荷珠涼水銀」と「柳絮の才」とは女子の文才を褒めている言

葉である。劇儀の慶世説に「謝安、雪の日に、公  
 女を内集して文を論す。俄に謝安、雪の日に、公  
 欣然として曰く、雪の紛々たるは何の似る、所  
 ぞと兄の子郎曰く、塩を空中に撒くに因りて起  
 すべしと道、蘆曰く、未だ柳絮の風に因りて起  
 るに若かずと、洛陽の印象は、柳絮から始つたの  
 で、このように洛陽の印象は、柳絮から始つたの

第三 洛陽の街から感有り

日本は三十八年以來の豪雪で悩まされたが、反  
 對に中国は三十年來の酷暑が、四月、初旬、の  
 午前十時に拘らず夏のような太陽が輝き、元  
 暹羅に飛び込んだように、暑かまり、露營の  
 もなる疲勞も加わり、若し、この露營の元  
 氣は遠い過去、馬寺詣になり、洛陽の北側、  
 43頁、白馬寺詣になり、洛陽の北側、  
 曠に、分、老、新、洛陽、洛陽、  
 物館、美術館、公園、新市場、各官庁、博  
 覆われた、広い舗道、真直ぐに延び、  
 此の型は何処の都にも共通する型だ、  
 だ、大土、都、共、事、つ、て、  
 限、り、大、新、街、中央、走、風、流、情、緒、満、点、  
 ら、柳、絮、の、綿、実、が、去、来、し、て、風、流、情、緒、満、点、

旧洛陽城は一部だけ、  
 外壕は矢張り、  
 城壁や城門は、  
 取壊され、  
 僅かに、  
 物を見れば、  
 家の、  
 骨と通説は、  
 町角に、  
 のり、  
 を開き、  
 も、  
 あり、  
 在、  
 は、  
 か、  
 づ、  
 人、  
 あり、  
 濟、  
 る、  
 の、  
 かつ、  
 が、

らない。旧城内をそぞろ歩き、さまざまな感想を懐きながらバスは再び郊外に向つて行つた。

#### 第四 白馬寺

洛陽城の東十二軒にあり、北は邙山、南は洛河を望む地に建立されている古寺である。東漢永年十一年（紀元六八年）に明帝が泰景等十余人（大臣級の者）を天竺（印度）に出使させ、大月氏国（今のアフガニスタン一帯）から仏教を伝えさせて建立した古刹である。中国仏教としては最初に建てたインド風寺院である。（後漢以前の仏教には寺院がなかつた）二頭の白馬に教典をつんで運んだ事から白馬寺と称し、現在もある「清凉台」は二人の印度の高僧「攝摩騰」「竺法蘭」が居住して、教典を翻訳したところである。両僧の墓は今も山門の両内側に安置されている。當時の洛陽は中国の歴史的名城として、世界第一流の繁栄した城市であつた。漢文仏教として「四十二章経」「十地断結経」「法華蔵経」の「本行経」等の仏教典籍が翻訳された。此の時の「跪拜の法」は、中国仏教史上の著名な「永平求法」であると云われている。その後、このように白馬寺の仏教は、中国全土の民衆の生活・生産に重大な影響を及ぼし、その後、

越南・朝鮮・日本等に伝わり、内外の文化交流の重要な使命を帯びていたのである。曹魏文王曹芳嘉平二年（紀元二五〇年）には印度僧の果柯迦羅がこの寺に來り、仏教戒律の「僧祿戒本」を伝え、當時の洛陽周辺には四十ヶ寺が建ち、仏教著作は九十余部といわれていたと云う。北魏王朝時代には一三六七ヶ寺、僧侶三千人と隆盛を極め、禪宗の初祖といわれる印度僧「菩提達摩」がこの寺に参り、信者は日々多くなつて其の勢力は天下に及び、これが中国古代思想となつたようである。戦乱が起り、北魏永熙年間（紀元五三二―五三四）再び仏教が興盛して、白馬寺も空前の繁栄をした。唐代の高僧で奈良・薬師寺の開祖「鑑真和尚」も白馬寺を朝拜し、数多くの寺院の中で白馬寺は特種な地位を保ち、多分日本の遣隋・唐使達も朝拜したと思われる。唐武宗時代に寺は再び灰燼したが、唐以降の統治者は白馬寺の復興につとめ、香火は尽きる事なしという盛況だつたと云われている。現在の大雄殿・千仏殿・法堂な修理が行われ、十五年（紀元一五五六）、大規模



・鼓樓等が建立され、大仏殿には明の彫刻、大雄殿には元の十八羅漢が残っている。白馬寺・観音閣と後方の清涼台



新中國が成立後、國務院は一九六一年に白馬寺を国の重要文化財に指定したが、林彪等四人組は三十余片の經典を焼いたと云われている。以上は簡単な白馬寺の歴史だが、二千年の古刻は幽静の中に我々に敬虔の念を懐かしたのである。

バスから降りると、山門の両側に据えられた石の馬が眼に入つた。白馬寺の象徴である。山門は印度の城砦のように赤煉瓦造りだ。屋根も亦一風變つて中国風でなく、オールド・デリの山のレッド・フォートを思い出させる。

山門の直ぐ後方に大石碑が建つており、釈迦仏の骨がまつられて直ぐ後方に大石碑が建つており、釈迦仏の骨がまつるにまつられ、中国境内にある十九ヶ所の一つが此の白馬寺である。

其の後方に天王殿が建ち、劍を持つた守護神が中央と両側に二体づつ安置されて、詳しく記述できない事は残念だが、影が禁止されていて、詳しく記述できない事は残念だが、力を尽した精巧さは驚異的である。

続く大雄殿は雲南で見たと中国風の仏殿で、殿宇の前には五米もある銅製の大香炉が据えられ、内部には明代の梵鐘が五つもある。本尊は釈迦牟尼仏で、其の両側に各々二体の仏像があり、香炉・燭台・大鼓・木魚がおかれていて、宗らしい内陣である。又東西の壁には各々九体の羅漢像がい

ろ千仏殿には壁仏五千体がまつられて、森嚴さを感じさせられる。内部は釋尊で、清涼台へと足を運んで行つた。

清涼台（前頁写真）は白馬寺の奥殿で朱塗りの東洋建築は雄偉壯観である。正面には「釈迦牟尼」「文殊菩薩」「普賢菩薩」の三体が、左右両側に「攝摩騰」「竺法蘭」の印度高僧の像が安置され、この寺の由緒ある歴史を物語つてい

る。引続いそ白馬寺東方の齊雲塔と呼ばれる仏塔を訪れたが、開封の相国寺と同じく、香煙が立ち昇り燭光の輝くこともない。中国政府は宗教の自由は認めてはいるもの、宗教活動が全く見受けられない光景は、誠に不思議であり寂しい極みである。

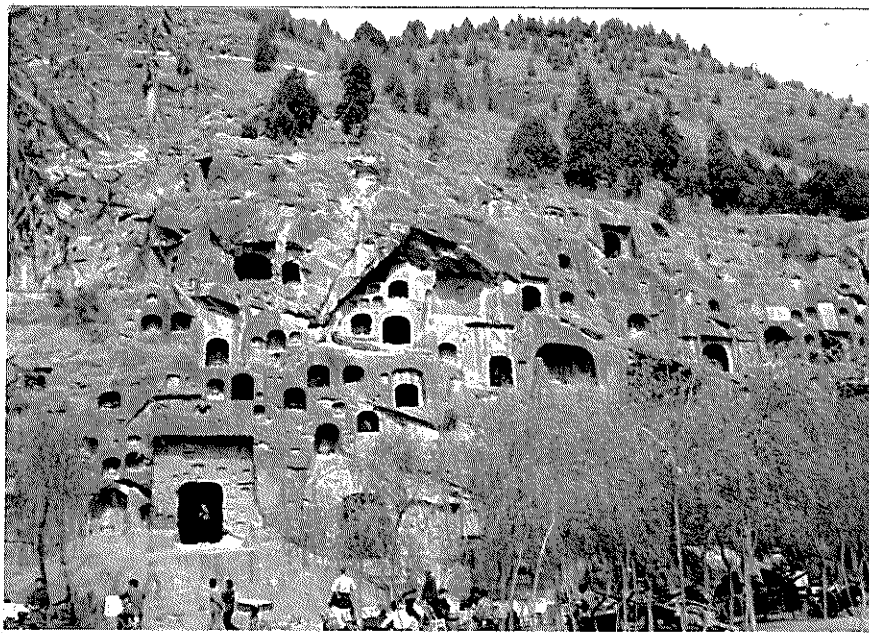
## 第五 竜門石窟

洛陽の南約十四軒、伊河をはさんで東西に向きあう竜門山の岩肌に、約六〇〇米にわたつて黒石灰岩に仏像が彫刻されている。三大著名石窟芸術の一つで、紀元四九三年、北魏の孝文帝が洛陽に遷都後に起工し、唐代までの四〇〇年間、各王朝によつて造営されたものである。特に唐代のもののが最も多く約六〇%を占めている。三六〇八の洞、三九の古塔、九七三〇六の仏像、三

、大きいもので高サ十七米、小さいもので三厘といわれている。中でも古陽洞が最も古く、寶陽洞は形式が完備した帝王后妃の供養浮彫として有名である。他に魏宇洞、連華洞など唐の彫刻が多く、造像名のうち書法に優れた四品（始平公造記、孫秋生等造像記、楊大眼造像記、魏靈藏等造像記）は特に竜門四品と称し、書道史上の貴重な資料である。四月十日、我々一行は午前八時半にホテルを出発した。洛陽の周辺は古都らしく数々の古墳が散在し、古墳の上に羊が草をはむ光景はのどかで大陸的である。洛河（旧洛水）にかかる洛陽橋の途中に、一三〇〇年前の唐時代の浮橋が見えた。古代の洛陽の町は洛水の両側にあり（現在は北側ののみ）、小さな石造りの建物（現在は北側ののみ）、だつたという。洛陽郊外の街道は行き来する馬車や荷車の数も多し。洛陽の街は「馬」の水車を廻らす田園風景は姿を消し、今では動力で揚水しているのが各所に見えていた。昭和十六年春に敢行された中原会戦その向うの北側を流れる黄河まで約五〇軒の距離がある。

に於て、黄河北岸に駒を進めた済源は丁度洛陽の真北に当り、また黄河々畔の峡谷に露営して

石窟群

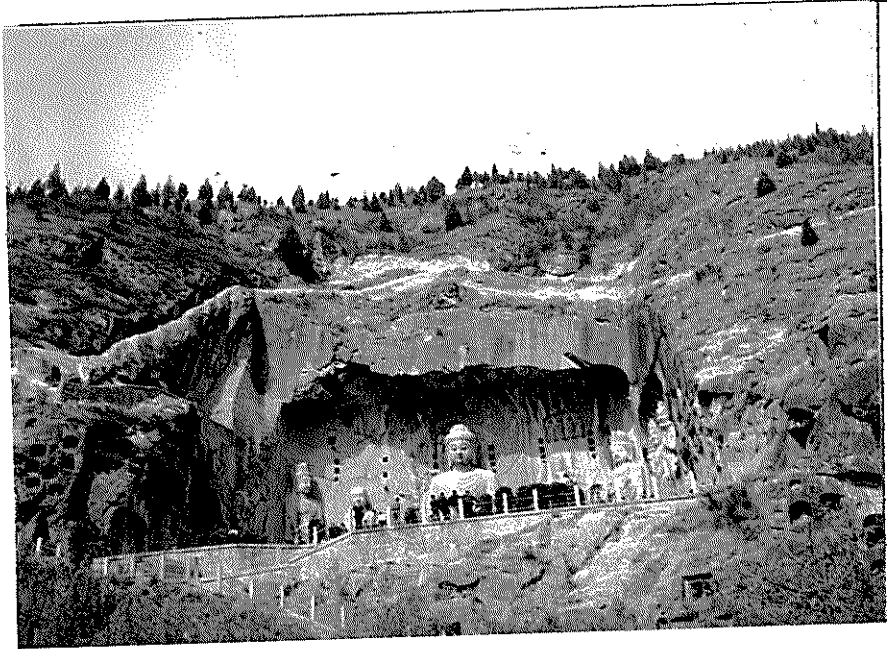


夜半に敵の猛砲撃を見舞われ、右往左往させられた狂口渡は西北方であり、あの中山の続きから

る龍門山の西山に到着した。漸く伊河の清流が優雅に流れて、石窟の彫刻は、今、楊柳の枝先は、日本であらば、釣り下りる人の姿が見られる。下の絶景である。本場は、糸を垂れば、釣りの人がいない。商人が軒をつらねて、中国の湖に、山水の男性と対面する。黄河の風光明媚さだ。中原の戦いに、山西の省を、石窟の仏像は、大規模なものだ。一帯に造られた石窟群は、他に例を見ない。大規模なものだ。片戦以來の外人による盗及び仏教と敵対した道教に、よる破壊の痕跡を云わね、この地、其の例にもれず、異教徒の破壊されたのであり、寺院、世界的な遺跡として、誠に

惜しいことである。

(参考) 道教とは黄帝・老子を教祖と仰ぐ中国  
龍門石窟中最大の牽先寺の石仏



の宗教である。老子・荘子の無為、自然の哲学の流れをくみ、これに陰陽五行説や不老・長生・昇天を説く神仙思想を加味し、符呪・祈祷・養生の術を行うもの。

後漢末の張道陵を開祖とし、仏教の教えをも取り入れて次第に宗教の形を整え、南北朝以来、中国の文化及び民間信仰に長く影響を及ぼした。即ち儒教・仏教とともに中国三大宗教の一つで、龍門石窟は道教信者で主に破壊されたのである。

石窟群の最も奥にあるものが「牽先寺」(上の写真)である。石仏の高サ一七・一四米。顔の長サ四米。耳の長サ一・九米の唐時代の作といわれ、完全な姿で保存されている。

他の小さな洞窟に一万五千体の仏像が彫刻されている。事なものや、或は「あまのじやく」の石像も彫られ、通訳の説明する伝説や其の他のことを記憶するのにも一苦労であつた。

(参考) 「天邪鬼」(アマノジャク)  
伝説上の怪物。神々が土地を開拓する時、妨害反抗する土地の悪霊の意味で、転じて善悪に拘らず反対する者をいう。

飽きはしない。又何度みても飽きない遺跡である。帰路、龍門の入口で中国人運転手に依頼して「紅旗」のハンドルを握らして貰つた事は良い思い出だ。又中国人に人気がある焼いもの味も格別で忘れられない事である。このような

延々と続く石窟群の見学は、たつぶり一日を費しても見飽きはしない。又何度みても飽きない遺跡である。帰路、龍門の入口で中国人運転手に依頼して「紅旗」のハンドルを握らして貰つた事は良い思い出だ。又中国人に人気がある焼いもの味も格別で忘れられない事である。このような

龍門石窟の見学は、今次訪中に於ける最も幽雅な一時だつたのである。

第六 さらば洛陽

訪龍門に遊んだ午後は寺院造りの洛陽博物館を  
名にし負う洛陽らしく、紀元前の夏時代の  
のから隋唐時代までの重要文化財の数々が展示  
されてる。あらためて中国古文明の発祥の  
地・河南省中原の偉大さを認識したが、私  
うな。唐三彩の絵葉書を買求め、興味が湧いて来  
た。文化を想起したが、これだけの博物館にパ  
な。レックも売つてない事、博覧会にパ  
フ引続いて案内された工芸美術は、その規模  
の文化内容まで開封院の比ではない、美演して  
る作品は目をみはるばかりである。又、古都  
いらしく古物品の造る工場の観光対象物として  
いるのも驚きで、其の価格の高価なことも亦、  
相当なものであつた。  
色工芸美術の真向にある労働人民公園は、  
つどり美の麗この上ない「牡丹」で埋ま  
で牡丹の玉卵黄色の「桃黄」「冰凌罩紅石」の牡

丹は氷にどざされたルビのように見える。そ  
のまが花を背に新しい撮影のようロケ隊の美  
女の春は、往時に優るものがある。洛陽は、  
陽の春は、往時に優るものがある。洛陽は、  
肥沃な土地がくわり、河が、河に囲まれた古  
の知恵が窺はれ、隋・唐時代の一人の都人  
が発見したといわれ、隋・唐時代の一人の都人  
も此の都を訪れて、他文化を懸念に吸収した歴史  
が、偲ばれてきて、他の文化を懸念に吸収した歴史  
か、戦後の親戚を覚える。我が国が高度の経済成長を遂  
げ、戦後の親戚を覚える。我が国が高度の経済成長を遂  
ゆか、戦後の親戚を覚える。我が国が高度の経済成長を遂  
た。河の各地へ、是非とも参りたいと願つた。こ  
とは誠に幸いな事であつた。無事訪問を終えた。こ  
の空と雲の色は複雑な色めいて漸く陽は山  
の陰に隠れ、別れを惜しむように、漸く陽は山  
きつた。洛陽、別れを惜しむように、漸く陽は山  
いにふける。酔の我等を、寝台列車は北京へと  
運んで行く。酔の我等を、寝台列車は北京へと

河南の三大都市を訪れてから北京に二日間滞在し、故宮・天壇・頤和園・万里の長城等を見学したが、私にとつては戦時の際に視察した地ばかりであつて、明の十三陵だけが初めての所であつた。

慰霊が主体であり、今次訪中の目的は、開封地区の京周辺は鄭州・洛陽は僅れの地であつたが、北この間に於て自ら直接見聞し、或は現地の北京周報社の論評や新聞記事、及び日本の報道等を参考にして、中国の印象や現状を私なりに若干記述してみたい。

但し十億の民を擁する広大な大陸の僅か一部に過ぎない河南省の訪門を以て、全中国を評する事は甚だ問題である。加えて短時間の上には各人の主観によつて左右されることは当然であり、軽々に述べることは論を俟たない。群盲象を撫す式に流れることは論を俟たない。

第一 殉国者祈願

「過去を振り返ることは、将来に対する責任を荷負うことである」

これは訪中する前の二月二十五日、ヨハネ・パウロ二世が広島市に於て発表した平和スピーチの言葉である。

戦争は愚かな人間の手に依る人間の破壊であり、死にほかならない事は、我等が身を以て体験した唯一の遺産だ。

青春を犠牲にして闘つた河南の地を始め、各方面の古戦場を訪れて両国の殉国者の霊を慰め、当時を想起することは一に平和に通ずる事である。我々のように戦争の凄惨を知つているか

らこそ、我々のように平和の尊さを沁々と感ずる平和に對する責任の重さを覚えるのである。

血で血を洗い破壊と憎悪の過去の闘いを顧みて、戦争を知らない子孫に對して、其の愚を伝へなければならぬ責任があるのだ。口先だけの平和を唱へる人達が、殉国者に對する慰霊の心に欠けている現状は、戦争体験者として誠に嘆わしいことである。

我々の慰霊は戦争を謳歌する意は毛頭なく、真の平和を祈願するとき、必ず殉国者の尊い犠牲に想いをいたし、平和を誓わなければならぬ。

十年一昔とはいへ、激しい流動の歲月は瞬時に過ぎ去り、めまぐるしい現象を追うことに精一杯な現今、一つ一つを記憶する事も不可能に近い。

「過去を振り返ることは、将来に對する責任を荷負うことである」

責任を荷負ふことだ。といふローマ法王の言葉  
 の意味に於て、今次二一九〇年訪中団の一員とし  
 て参加して當時を想い起したことは、我々にとし  
 つて意義深いことであつた。隊出身の「斎藤貞二  
 氏」の時を同じくして、我が隊の「斎藤貞二  
 氏」の絶大な御尽力により、人の変るとはいえ  
 た事は感のない記録として、子孫に伝え慰霊と  
 変ることのない記録として、孫に伝え慰霊と  
 平和に余生を捧げたいものである。記事「戦没者  
 祈願、五月二十七日の読売新聞の記載し、戦没者  
 としたい。日本を見習えと元米兵」を記載し、参考

、ベトナム戦争の「後遺症」に悩むアメリカ  
 、毎年五月の最終日（戦没将兵追悼記念日）  
 校がない。ベトナム戦争に参加した米海兵隊の将  
 校が、日本人の追悼の念の深さを引き合ひに出  
 悼もう、アメリカ人も過去を思い起こし、死者を  
 呼びかけている。△  
 「八年前、日本人観光客で一杯のサイパン島  
 のホテルのスタッフが、私はこの月、ア  
 の死を正当化してからの歳は、ア  
 一軍兵士の死を正当化してからの歳は、ア  
 一九四四年六月十五日の上陸作戦当日、わか

が將兵に向つて、諸君が打ち負かそうとして  
 る敵軍、諸君を撃ち殺そうと銃口を構え、  
 が一世代もたない戦場や墓場を経済的に支配  
 ひ護ることになる。諸君の戦場や墓場を  
 する墓地在敵軍の子どもたち話の反  
 の墓地在敵軍の子どもたち話の反  
 たろうと言したなら、彼等はどんな反応を示し  
 見られる。その中に日本市民が巨費を投じて  
 建てられたものもある。私はサイパンの巨費を投じて  
 身投げ断崖にもある。私はサイパンの巨費を投じて  
 選んだ幾千もの日本軍將兵が身を投げたところ  
 だ。私胸を打たれた。崖の下土をふるいに  
 けして、肉の親や友人達をねんごろに集めて  
 る。それとは対照的に、年々アメリカ人の  
 ば、十代初めに建てられた小さい  
 な、十代初めに建てられた小さい  
 ヨタ代理店の前にヘルメットをのせていた  
 区別して、昔の戦と犠牲となつた兵士たち  
 兵役の気高さを思い起す精神の強さを  
 起こすのは、国家を証し、兵士たちを  
 だげである。勝つにせよ、敗れるにせよ、現代に

おいて戦争とは対外関係の処理にあたる政治の失敗を意味する。また短期、長期を問わず、最も痛ましく最も高価な代償を支払うのが戦争である。そして国がその理想と国土を維持する場合同、戦争は避けられない事もあるのだ。こうして、違いをどのようにしんじやくし、私たちを守れることを命じられて、犠牲になつた人々に、どう報いたらよいのか

「思い返すことから始めよう。共に、メモリアル・デーに思い出してみよう。儀式はつたことはアメリカ人にはなじまないし、もとより私たちは民族的にも多様である。権力というものは崇拝されるよりも、疑われるものである。ジャナリ考えに私たちは基盤を置いている。ジャナリストのH・L・メンケンが指摘したように、文明人とつて平和な時代に国を尊敬することに、政治家を尊敬するのと同様に不可能なことはあるだろう。この連休に海へ行つたり、パルベキユに友人を招いたりする人もいるだろう。だが、このレジャヤを楽しめるのも兵士たちの犠牲があつたればこそであり、その霊を追悼するため、ささやかな時を私たちみんなで、さきたいものだ」

△(五月二十五日付、ワシントン・ポスト紙)

参考までに中国人の日本人慰霊団に対する感情を附記する。旧満州地区参拜団の盛大な現地慰霊祭は、中国の人々の猛しい反感をかつているようだ。経済大国らしい外観的なことではなく、慎しい心のこもつたものであつて欲しい。南の最後の死戦場となつたビルマや中国・雲南省に於て、日本軍の玉砕した騰越(中国領)の県議会は、日本人の入国を拒否する議決が行われたのである。理由は幾千名にのぼる日本軍の玉砕もさることながら、中国・雲南遠征軍は八万人、それに加えて膨大な数の民間人犠牲者を出しているのに、日本人のみの慰霊団は片手おちだとして云うのである。この情報は私が中原の訪門を終えて帰国後、当時の聯隊会報から入手したものである。開封周辺地区に対する我々の現地慰霊が拒否されたが、上記のような理由があつたのかと窺えるのだ。広島や長崎で被爆された御遺族の方々は、生涯その恨みを米国に抱いているものと想像する。戦争は勝者にとつても敗者にとつても、これほど無惨で虚しいものはないと教えている。



省亡爆年業大二千貨ま三なく制方政にに見るのわの  
 にしたの破裂させて自殺し、十五人から山に  
 下に放したは四月中の身地だ。北京に  
 戻れない事  
 亡したの破裂させて自殺し、十五人から山に  
 戻れない事  
 爆弾を破裂させて自殺し、十五人から山に  
 戻れない事  
 年が、事に就けないことを苦にしようだ。  
 業者は三千万ともいわれていたが、二千万とも  
 大縮減は更に其の数を増すだろう。(潜在失  
 二千六百万ともいわれていたが、二千万とも  
 貨の増発である。因は、財政赤字を補うための通  
 まで工業化され、事でも明瞭だ。田舎県庁の地  
 三大都市に限らず、中牟のよう。この事は河南の地  
 なく、なつたと報道されて、縮小は思うに任せ  
 制が緩み、地方の基本建設の結果、中央の統  
 方或は企業の自主権を拡大した結果、あり、地  
 政財赤字の元凶は膨大ならぬ。累積した失  
 に見舞われた原因が生じた。勿論、半年や一年の間  
 の政治・経済の急変、インフレーション、失業の三重苦に  
 昨年の十月、雲南・広西・広東各省を二週間に  
 訪れたが、その後、半年の間に中国

不満を持ち、自爆を遂げて十数人が死亡した中  
 京各地でこのように出来事では珍しくない。現  
 国各地で悲惨な失業問題は、各地に於ても確  
 なり、今次訪中直接見聞した各地に於ても確  
 に工場が建ち並び外見上は驚くほど復興して  
 た。しかし物資を運搬するトラックや列車は微  
 々たるものだ。私が見たが、経済力を計る一手段  
 として、輸送の状況を見れば一目瞭然ではない  
 か。工場建設の感がしてならぬ。労働者がない  
 な。其の上には昼寝付(二時間)の働かない工場  
 労働者では成産の向上は望めず、以上の報道を裏  
 市街地にあふれている。光景は、失業者の群が各  
 付、文華裁判中に伝えられた華国総主席の辞表提  
 出、第十一期中総会に於ける経済運営の失敗の  
 の副主席に降格した。変は、経済運の責任を  
 責任を問われた。石油派に帰せられるか。石油資  
 華輸出の取入を近代化の資金に充てるか。石油資  
 源小平副主席の路線の核心をなしているか。答であ  
 つた。何れにしても権力闘争に明け暮れ、朝令  
 暮改の政策は混乱に陥るばかりである。暮れ、朝令

第三 民衆の生活

と結論的にいえば、我々の在支時代と大差なしという判断で、非常に貧困である。から貧困も仕方がないと思つていたが、中原の地・河南省の時、大都市の人民の生活は直接自分の眼で眺めた。早朝の街を一部巡して興味深く衣食住を視察した。極く一部の工場労働者の住宅（アパート）は、充てて四十年前と大異なつた。道路は、整備され、電燈は田舎の果てまでも完備して、生活環境は格段の進歩を遂げたが、直接の衣食住の生活状況は以上の結論であつた。直接する機会に恵まれず、是に記述する事は困難だ。が、往時のような民間の商店は姿を消して夜の街は特に寂しく、北京銀座の王府井も例外では道と近代建築（官公庁）の増加の他は、左程驚くような発展ではなく貧富の差の夥しいこと。が眼に留つた。四月二十二日の北京放送は、中国国家统计局が実施した一九八〇年の勤労者の消費パターン。調査結果を發表した。この調査は北京・上海及び

- う工場労働者・政府勤務者・技術者・教師・科
- 学の七千九百六十二世帯を対象に行われたも
- ので、当然ハイレベルの人は工場労働者より二
- 割低く、この調査には入つていない）
- 三割商品消費支出に占める食費の割合は六〇・
- 六％。衣服費は一八・六％。日用品、書籍、
- 一 娛樂費は一五・六％。入浴、託児、修繕費は
- 2 月平均二・八六元（日本円で四一四円）。
- 3 消費総額の約七％。
- ラム。一人当りの月平均穀物消費量は一三キログ
- 4 豚、羊、牛肉の消費量は一人平均一・五キ
- 5 キログラム。アルコール消費量は月間〇・二五
- 6 ミシンは六六合。ラジオは八五合。テレビは
- 7 三合（白黒12インチ）。扇風機は二二合。
- （但しホテルにもテレビの設備はなく、市街
- 6 一人当りの月平均消費支出は三七・五元。
- 7 一世帯当りの賃金生活者は二・三五人。

く○ れた。	元三 十才 代の 通訳 氏の 給料 を尋 ねた ところ 、七	農 民は 四〇 元六 〇元 一七 ・四 〇〇 元	経 験八 ・七 〇〇 元六 〇元 一七 ・四 〇〇 元	一 般四 元六 〇元 一七 ・四 〇〇 元	一 般二 元六 〇元 一七 ・四 〇〇 元	一 般三 元五 〇元 一七 ・四 〇〇 元	一 般八 元五 〇元 一七 ・四 〇〇 元	見 習工 は三 三元 （同 、七 八五 元）	大 学卒 初任 給は 四九 元（ 同、 七・ 一〇 〇元	平 均賃 金は 六〇 元（ 日本 円で 八・ 七〇 〇元	給 料の 二・ 三〇 元三 ・〇 〇元 ケ月 分）	自 転車 は一 四〇 元一 八〇 元	（日 本円 で二 四〇 元三 ・三 〇〇 元ケ 月分）	中 国製 十二 イン チ白 黒テ レビ は三 七五 元。給 料の 六・ 二五	月分） （日 本円 で七 四・ 五三 〇元 。給 料の 八・ 五ケ	1 絡陽 に於 て通 訳と の会 話中 の参 考事 項 。日 本製 十二 イン チ白 黒テ レビ は五 一四 元。 給料 の八 ・五 ケ
-----------	---	--	--	--	--	--	--	---	---	---	---	--------------------------------------	---	--	---	---

よ  
うに  
特別  
な高  
額所  
得で  
はな  
い。  
諸民  
の収  
入が

平  
均し  
て子  
式の  
為に  
文句  
を云  
わな  
い。  
は平  
を弾  
圧

も没  
する  
もの  
か、  
其の  
点に  
ついて  
の民  
の心  
情は

知  
る由  
もな  
い。  
、非  
常に  
深刻  
だ。  
婚約  
はし  
て

も部  
屋が  
ない  
ため  
、結  
婚が  
でき  
ない  
。人  
々が  
六割

にも  
達し  
てい  
ると  
云わ  
れ、  
結  
婚式  
を挙  
げて  
親元

に別  
居し  
てい  
るカ  
ッ  
プル  
は、  
又新  
聞に  
「恋  
人を  
さ

い引  
きを  
して  
いる  
をさ  
うだ  
。又  
大變  
」と  
いう  
記事

が掲  
載さ  
れて  
いた  
。が  
す方  
が大  
變」と  
いう  
記事

が物  
価一  
元上  
昇は  
一年  
一五  
％に  
達し  
、財  
政赤  
字が  
百

億一  
途を  
たど  
り、  
唯一  
の外  
貨か  
せ、  
失業  
者は  
増加

の計  
画に  
手違  
いが  
生じ  
、外  
輸出  
は思  
うよ  
うに

進ま  
なく  
なつ  
たば  
か、  
国内  
生産  
設備  
の三  
〇

％が  
エネ  
ルギ  
ー不  
足、  
ため  
の休  
業生  
産に  
陥つ  
たと

報  
道さ  
れて  
いる  
。現  
在、  
諸民  
の生  
活は  
甚だ  
苦し  
いと

も  
の判  
断さ  
れる  
。以  
上、  
諸民  
の生  
活は  
余り  
向  
上

が  
体験  
した  
四十  
年前  
と比  
較し  
て、  
余り  
向  
上

が見  
られ  
ない  
とい  
う印  
象で  
ある  
。余  
り向  
上

が極  
言す  
ると  
、貧  
困な  
生活  
の実  
態を  
眺め  
る時  
、今

は普  
通の  
地主  
階級  
が搾  
取し  
てい  
る意  
義が  
解る  
のか  
ら考  
えら  
れな

い共  
産党  
が人  
民は  
解放  
の意  
義が  
解る  
のか  
ら考  
えら  
れな

第四 精神主義の復活

無計画なプラント輸入など強引な高度成長策  
 が失敗に帰し、対外的に契約の破棄が宣言され  
 の、国内の三重苦にあえぐ中国は、戦時中の日本  
 のように精神主義が強調されて、將に戦時であ  
 る。左翼偏向を攻撃して右傾化したか見えな  
 、外国との交流が増えるに、自由・個人主  
 義が横行し、意志薄弱な幹部や大衆が其の影  
 を受けていると、して、革命精神を見直すよう  
 と指導部は力説して、鋒先をかまし始めたよう  
 と思える。文革中の「平等に貧しく」から「先  
 うかる所から豊かに」と方向変換し、其の先  
 葉が不平が生じたのであり、自由化運動の盛り  
 から不平が生じたのであり、自由化運動の盛り  
 ン中国の自由労働者を設立する動きがあつた  
 う、千人の失業者が出た。昨年暮には上海で  
 千の失業者が出た。昨年暮には上海で  
 わたつて大規模なデモが行われ、三日前に  
 新彊ウイグル自治区では下放青年の反体的  
 暴動が起り、チベットでは自治区でも反体的  
 の「世界終末の書」がバット自出版物が送られ  
 住の外国人家庭に反体制の地下出版物が送られ

たことなど、人心は揺れ動いて世相は乱れ、赤  
 裸々な民衆の不満は枚挙に暇がないようだ。  
 秩序の拡大に努めて政府は壁新聞までも禁止し、法  
 だけ、経済調整に向つて混乱を抑圧して締めるよ  
 。三月三十一日号の北京局報の政治欄に「党風  
 を正す」と題し、四つの基本原則（社会主義の  
 道、人民主義、マルクス・レーニン主義・毛沢  
 東思想）の指導堅持しなすべからぬと強調し、  
 党の現行方針は正しく人民から支持されてい  
 と宣伝に努めている。人民の最大の不満は少数  
 と、また幹部の特権思想と作風の二つに集中し  
 て、泊らぬ、歩かない、贈り物を受け取らない、  
 を見て歩かない、贈り物を受け取らない、このよ  
 令の拒否したのでも、私的贈り物、日本の菓子  
 が発覚すれば、即刻罷免だ。若し受け取つた事  
 な事柄である。特退と題し、「退却は困難  
 革命家としての前進に攻撃退却はあつた」と  
 述べ、革命の過程には攻撃退却はあつた」と  
 ように、革命の過程には攻撃退却はあつた」と

化して因る。但し方向変換しなければならぬ。国民
 つたたる。反て来いというだけ果して国民
 らず、たの付らうか。このうだけ果して国民
 は納得するの。小平演説の精神主義の学習を
 週一各職場では、四時間の割合で実施し、「苦し
 みを恐れぬ。今日精神を「難を切り抜けよう」の明
 日のため、今日精神を「難を切り抜けよう」の明
 ような精神主義を説いてゐる。戦争中の我が国の
 (一人一般国民)に賣有りと「国家の興亡、匹夫
 立て、理想、道徳、北京師範大学附属中には「志を
 新と、出版、碑、知識、体力のある人になる。
 致し、なれば、秘密結社、と「中央七号通達
 が、三ヶ月には、秘密結社、と「中央七号通達
 学九、号通達には、秘密結社、と「中央七号通達
 盛り込んた。首都大学生の喫煙、酒の禁止など、
 し、一般の経済調整政策を進める為、国内の混乱を
 当面の規律と秩序の回復をはかる。としてゐる。
 抑え、この事は裏を返せば、権力闘争が再び表
 事は確からぬ。裏を返せば、権力闘争が再び表

面に落ちた。この共産党への信頼は、復た懸念。
 者は、この共産党への信頼は、復た懸念。
 うちは、この共産党への信頼は、復た懸念。
 出直した。幹部を徹底的に審査し、その不審
 て、生れに安んずる。その不審
 して、生れに安んずる。その不審
 て、生れに安んずる。その不審

第五 対日・対外人感

一先進諸国の月日第十回大会で「世界各
 代九七八年の十一月十日、世界各
 に、前、列、立、た、小、平、鶴、声、大、方、針、を、上、げ、世、界、各
 の、前、列、立、た、小、平、鶴、声、大、方、針、を、上、げ、世、界、各
 の、前、列、立、た、小、平、鶴、声、大、方、針、を、上、げ、世、界、各
 の、前、列、立、た、小、平、鶴、声、大、方、針、を、上、げ、世、界、各
 の、前、列、立、た、小、平、鶴、声、大、方、針、を、上、げ、世、界、各

奮闘する「と答えたのはわづか一一％だった事  
 は、偽りのない人民の声であろう。  
 三年前の都小平の訪日を機会に、日本の優れ  
 たところばかりを喜んで毎日、全国に放送した  
 結果、一般大衆は米国以上に日本が発展してい  
 るように受けとめてゐる。  
 自動車・鉄・電機等の産業は遙かに米國を凌  
 駕してゐるもの、世界の各分野のことも知ら  
 ないインテリゲンチヤの訪問者が多い（  
 の眼には、そのように映つたのも無理からぬこ  
 とだ。一言の不平も云わず、食事も不用、睡眠  
 も不用、二十四時間を続けて働く自動車の工場  
 も不用、二十四時間を続けて働く自動車の工場  
 ロボットを見せ付けられ、其の上、欧米への洪  
 水のような輸出に對する苦情が世界のニュース  
 として流れてゐる。今、当然そのように日本を  
 評価したのである。今、然る所のよ、我が國から学  
 び取るうとする意欲も旺盛である。  
 街頭では學生を始めとした一般大衆から、ホテ  
 ル内ではボーイ・メイドなどの従業員達から、  
 日本語で話かけられ又教えてくれと中学生から  
 もせがまれたことは、数十回にも及んで親日感  
 を肌で感じたものは、しかし今次の訪中では其  
 のような友好的な感情を受けた事がない。これ  
 いたはな基因してゐるのか旅行中にも疑問を抱

親日の態度を示した彼等は、週一回のNHK  
 放送で日本語を独学して學んでゐる者がいたが、  
 河南省では放送を聞いて學習する人がいないの  
 だらうか。文化程度の高い管の中原の地に於て  
 そのような話しかけない。遺憾の懐しい河南に於  
 て誰一人、話しかけに遭つたのだ。これは原因  
 よりも寂しいことであつたのだ。  
 が、僅か半年間にこのように變化したことは原因  
 がなればならぬ。新しい通達が出されたのはな  
 接觸を避けよ」と新通達の内容は「外国人は危険、  
 接しかと推察できると。此の通達はいつのはな  
 出されたのか、通達の内容は「外国人は危険、  
 明らかでないが、通達された事は消筋が語  
 つてゐる事ではないが、通達された事は消筋が語  
 明、其の通達には、外国人は常に情報を探めてお  
 り、危険な存在であるとの警告してゐると云われ  
 、在北京外国人が中国人の知人に電話をかけた  
 も、来なくなつたと云ふことだ。ましてや、公衆  
 の面前に於て外国人と会う機会を避けようとし  
 てゐる事は、背けることである。  
 、従つて我々の現地訪問を不許可にしたことも  
 、外国人との接觸禁止の通達に依るものと考へ  
 られる事だ。我々外人の服装一つを見ても羨望  
 の的になり、指導部非難の原因となつて、政  
 不信、各種の締め付けの思へない。

敗戦後の悲惨な零の状態から再興の意気に燃  
 えた日本は、戦勝国の米國との交流を深め一貫  
 して相互信頼の信條に依つて、今日の繁榮を成  
 し遂げた歴史を考へる時、中國の指導者を始め  
 とした國民は其の轍を學び、これまでのような  
 政權闘争に明け暮れて徒らに國際信用を失墜す  
 るような愚を避けなければならぬ。重症患者  
 の自覺のもとに先進諸國から優れた専門家を招  
 き、外國人は危険・接觸を避けよなどの狭い考  
 えを除き、繁榮を心底から希うものである。取  
 り入れ親しい古里とも思ふ中國國民の暮し  
 の向上を願う一人として、大風呂敷の英雄の出  
 の向はなく、地道な血の通つた為政者を期待し  
 て黨の還歴祝を記念に、國際信用の回復、經濟  
 ピンチの脱出、生活の向上を期待して已まない  
 次第である。

末で、「食糧の増産さえで出た大躍進の後始  
 末で、白ネコは良ネコだ」といつた鄧小平の  
 良い。白ネコは良ネコだ」といつた鄧小平の  
 を捕えるネコは良ネコだ」といつた鄧小平の  
 言葉。徹し欲しいばかり、生活を第一に考へる  
 哲学に徹して欲しいばかり、生活を第一に考へる  
 たのだ。

最後。北京に於ての特筆したいことは、若い  
 通訳が北京に於ての特筆したいことは、若い

中國人の知らない中國を數千年の歴史を學び、又  
 四十年前の中國を訪問して見聞し、過去と現  
 の我々が再び中國を客觀的に眺めて判断され  
 在ることを照して我々若し中國人より以上  
 ことを正し、昔を知らぬ我々若し中國人より  
 激的に述べた言葉であつた。

昭和五十六年六月

印刷

昭和五十六年七月

発行

「河 南 紀 行」

昭和五十六年四月 訪門

著 者

寺 前 信 次

印 刷

寺 前 信 次

石川県加賀市山代温泉神明町七ノ三番地  
電 話 〇七六一七一六一〇三二一

著者の歩兵二百十九聯隊略歴

昭和十五年

歩兵第二五聯隊より転属

昭和十五年

歩二一九、十一中隊附（陽武）

昭和十五年、十六年

同 九中隊附（通許）

昭和十六年

同 聯隊本部附（旗手）

昭和十六年、十八年

同 三中隊長（中卒）

（以降、陸軍士官学校教官を経て、ビルマ派遣軍第五  
六師団歩一四六聯隊大隊長として、雲南省・ビルマ  
の戦闘に従軍し、終戦を迎えた）



中国河南省·开封·郑州·洛陽·附近

